

クラシック巡礼 7

フレームスの彷徨

サイト掲載: www.i-s-m-kk.co.jp/

2019年 7月20日

別当 勉

<betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp>

「ブラームスの彷徨」引用曲一覧

Tr.	曲名	演奏
1	主題と変奏 Op. 18B (弦楽六重奏曲第1番：作品18a 第2楽章の主題) https://www.youtube.com/watch?v=ecrxw5IClpw	P:クリスティアン・ツイーマン
2	ピアノ協奏曲第1番 第1楽章, Op. 15 https://www.youtube.com/watch?v=RRMnwLS9eUg	ブレンデル(p) / アバド / ベルリン・フィル (1986)
3	ピアノ四重奏曲 Op. 25 https://www.youtube.com/watch?v=7BPX4ppMFQY	Fauré Quartett
4	パガニーニの主題による変奏曲 https://www.youtube.com/watch?v=rptzLqL2wck	P:エフゲニー・キーシン
5	アルトラプソディ Op. 53 https://www.youtube.com/watch?v=wXX7XphQABI	Marjana Lipovsek/ Ernst Senff Chor/ Berliner Philharmoniker/ Claudio Abbado
6	ドイツ・レクイエム Op. 45 https://www.youtube.com/watch?v=aWMGk4tiYPQ	オットー・クレンペラー(指揮) フィルハーモニア管弦楽団 / 合唱団 エリーザベト・シュヴァルツコップ(ソプラノ)
7	交響曲第1番 Op. 68 https://www.youtube.com/watch?v=NU13001P7cA	ミュンシュ指揮 / パリ管弦楽団 1968
8	ピアノ協奏曲第2番 Op. 83 https://www.youtube.com/watch?v=snuS5cyfaY8	バックハウスp, カール・ベーム指揮 ウィーン・フィルハーモニー
10	交響曲第4番 Op. 98 https://www.youtube.com/watch?v=MW-YqiKcnfo	ブルーノ・ワルター指揮 コロムビア交響楽団 1959年

プロローグ

ブラームスの彷徨

ヨハネス・ブラームスの生涯は、放浪者生態にあった、という一言に尽きる。彼に作曲と指揮という天賦の才能が無ければ、みすばらしいホームレスのボヘミアンで終わっている。プッチーニの歌劇「ラ・ボエーム」に出てくる^{うだつ}税の上がらない登場人物の一人とでも言えよう。

ハンバーグ・ステーキの^{みなもと}源であるドイツ北方の暗い港湾都市ハンブルグの貧しい家庭で生まれ育った。母クリスティアーネは、父ヨハンより17歳年上であり、この不釣り合いの夫婦の二番目の子供として生を受けた。



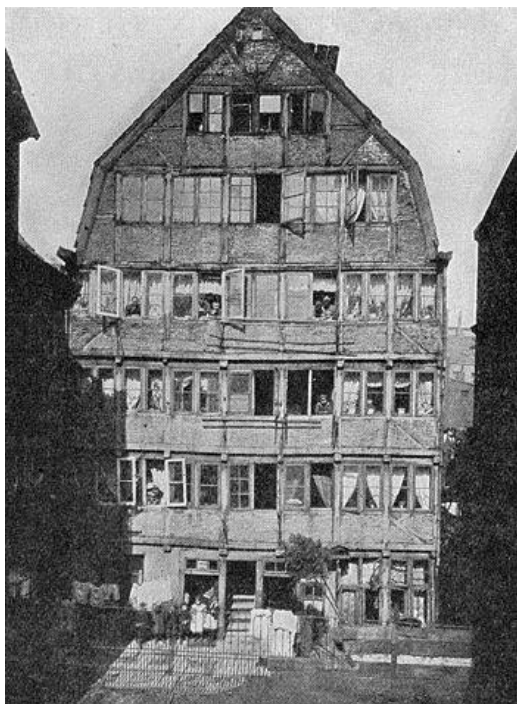
しかしながら、父ヨハン・ヤーコブは、しがないコントラバス奏者であって、僅かばかりの稼ぎしかないのに、この夫婦は子の育成には熱心であり、才気ゆたかなヨハネスに手厚い教育を施した。

結果、ヨハネスはピアノ演奏でめきめきと腕を上げ、酒場やダンスホールでのアルバイトも始めた。

そのうち、音楽の教師が、エドゥアルト・マルクスゼンという著名な作曲家にヨハネスを紹介して、弟子入りさせた。これが、ピアノ演奏と作曲に関するヨハネスの膨大な埋蔵金脈から天賦の才能を掘り出すことになったのである。

そして、19歳になった生意気盛りが、武者修行に彼を駆り立て、ヴァイオリニストで新進気鋭の2歳年上のヨーゼフ・ヨアヒムと出会うことになった。まさに金と銀の出会いとでもいうか、激しい相互啓発反応が生じた。彼はヨハネスの生涯を通じた親友となる。

ヨアヒムの強硬な誘いで、気が重いながらも、デュッセルドルフの大作曲家シューマンの門をたたいたのである。この結果は、前回で述べたとおり、彼の楽才に驚愕したシューマンは、ヨハネスにドイツ全都市周遊券ともいうべき切符、音楽新報における《新しい道》という論評を与えたのである。



<http://harucla.cocolog-nifty.com/blog/2012/11/post-888a.html>
ブラームスの生家(古アパートの一室)

同時に、青年ヨハネスは14歳年上とはいえ、美貌のクララ・シューマンに恋心を抱いてしまった。シューマンが発狂して精神病院に入院してから、クララは8人目の子を出産した。

産褥後に体調が戻ってまもなく、7人の子供たちの尋常な養育のために、意を決して演奏旅行に出かけ、稼ぎ始めた。ヨハネスは、クララの留守中に大きな子供たちの世話焼きをする破目にみずから陥った。シューマンが他界するまで、おおよそ2年半もそれに費やしたので、禁断の恋情とも気づかないまま、その悶えに苦しんだ。毅然としたクララの姿勢に加えて、シューマンの埋葬におけるクララの悲愴な姿をみた23歳のヨハネスは、一歩退いて友情という電車に乗り替えたのである。

しかしながら、「諦め」は理屈であって、心理も記憶もあきらめてはくれない。この北ドイツの武骨な男は、それを死ぬまで彷徨しながら重々しく曳いていくのである。身が凍るほどの一途さであろうか。ところが、ヨハネスの胸中には、灼熱^{しゃくねつ}のマグマが眠っていた。やがて、それが溶岩となって噴き出し、大地を揺さぶりながら岩石を溶かして、海水を蒸発させる大噴火をたびたび起こすことになる。



ハンブルグ <https://www.dfds.com/ja-jp/passenger-ferries/destinations/germany/hamburg>

彼のマグマが噴き出すことを、『ヨハネスの咆哮』と私は呼ぶが、心の叫びと言うは容易い。
彼が咆哮した音楽を聴くたびに、私の胸の震えは止まらない。

クララ・シューマン: 38歳

20歳のブラームス



<http://www.classichistory.net/archives/clara-schumann>

<https://blog.goo.ne.jp/pianist-gensegawa/e/1336835176771130e50c30c957f39c5c>

シューマン邸に初めて訪れた20歳のブラームスが披露した曲は、次の2つと言われている。

ピアノ・ソナタ第1番 作品1 スケルツォ 作品4

これらの作品よりも、続けて作曲した

ピアノソナタ第3番ハ長調 作品5

の方が、ミニ・ヨハネスの重厚さが見事に表現されている。たぶんロベルトはこの曲により激しく反応したと想像する方が、納得がいく。しかしながら、ヨハネスはこの第3番をもって、生涯、ピアノソナタの創作をやめているのは、何故だろうか、歴史は語っていない。

たぶんバッハに学んだ《変奏曲形態》に触発されたからともいえる。

さっそく、ロベルト・シューマンは、ヨハネスに、出版社を紹介した。億劫がるヨハネスをみて、昵懇の出版社にも連絡をとり、手取り足取りの労を厭わなかった。それほどヨハネスを見込んでしまった。

なのに、どうしてこの若者はクララに横恋慕してしまったのか、純真な若者は初めての心の憧憬と動揺に自身でも気付かないまま推移してしまった。クララも精神病院に入れられたロベルトに会えなかった。彼を^み看たいのに、当面の間、医者から面会謝絶された。だから、彼女は余計に^{しょうすい}憔悴したところに、青年ヨハネスの優しい同情と慰撫に、クララの心が自然に寄り添っていくことは、人間として当然である。さりながら、彼女はロベルトの妻であり、彼の愛児たちを育成するための努力に、彼女は救いを求めたのである。それが、阿修羅のごとく打ち込んだ長期の演奏旅行であった。

ただし、問題が残されている。どうして病院側はクララの面会を拒絶したのか？ 思うに、ロベルトの発狂においては、クララの言動に関する狂乱的発声が多くみられ、それが病因と診断されたのであろう、と私は推理する。したがって、クララが面会・看護すれば余計に刺激して病状が悪化すると判断されたのかもしれない。

^{ちまた}巷では、ロベルトよりクララの方がヨハネスに情深く接したからだ、という噂も流れたらしいが、半分ほどは信用できる。というのは、あながち否定できないし、ヨハネスの若鷲のような才能に敏感すぎるほど反応したのがクララだった。それほど彼女の楽才診断能力は、群を抜いていた。16歳の時、父ヴィークが半ば放棄していたロベルトの才能を見抜いて惚れ込んだ時のように、ズバ抜けていたのだ。このことは、この巡礼でたびたび話題になる。

男女間の恋情の行方には、時たま、見た目の美醜よりも、相手の^{とてつ}途轍もない才能に触発されることが、無視できないほど大きく作用するのかもしれない。これは、神々の「種の保存則」に準拠するものと私は考えている。

放浪

オランダのロッテルダムに演奏旅行に出かけたクララを、入院療養中のロベルトを失いつつある阿修羅の彼女を、22歳のヨハネスは追う。

「貴女は私に何をしたのです。この魔法を取り除いて下さらないのですか。」そして、

「貴女に宛てて書いた言葉で、愛を語っていない全ての言葉を僕は悔います。」

と書き送る。こんな熱い手紙は、これしかない。これに対するクララの返事は、残されていないが、翌年の手紙には、37歳のクララが受け止めた残照が見られる。

「今すぐにも長い手紙を受け取れないかしら？ 私にクリスマスの喜びを与えてくださいな。――

―― それは私にとって本当に大事なことですなのですよ！ 愛するヨハネス、そのために時間を

取ってください。―― 1分でも長く…… お大事に、愛するヨハネス。あなたがいらしゃって

下さって嬉しかったわ。ただ、余りにも短かった。―― ほとんど夢の様でしたわ！―― 心か

らあなたのクララ」(1856年5月)

<三宅幸夫著「ブラームス」より>

このようなやりとりが頻繁になされていたことは、私達には夢想だに想定できない。どうも事実のようである。もっと危ない書簡もあったようだが双方で焼却したらしい。この手紙だけでも、ギリギリの一線を超える何か起きたなら二人は結ばれたかもしれない、という事態を明らかにしている。そして、あのゲルマンの巨人ブラームスは音楽史に燦然と現れることはなかったにちがいない。

芸術家にいわゆる志望の幸福が訪れたなら、道半ばで有象無象の音楽家たちに埋もれてしまふものと、考えてしまうのは私だけであろうか。その意味では、シューマンは奇跡的にそうしたジンスに当て嵌まらなかった。

1856年7月29日、46歳のロベルトは静かに息を引きとった。この出来事により、若い血潮がたぎりながらも、敏感な心魂を持つヨハネスと、女の仁義に目覚めた熟女のクララと、双方に制動力が働いたものとうかがえる。

ヨハネスが27歳ごろになっても、どうも思慕の情に耐えられなくなって、次のような書簡にて打ち明けられており、彼の心が名曲にありありと語られている。

***** <<https://ameblo.jp/wmx07589/entry-12446116381.html>> *****

クララに宛てた手紙に、溢れんばかりの熱情が綴られている。

「どれほどあなたにお会いしたく思っていることか！どんな物音を聞いても窓辺に駆け寄ります。あなたのことばかり思いつけているのです。あなたを思い、あなたのお手紙を読み返し、あなたのお写真を眺めること以外、何も手につきません。あなたなしにはもうこれ以上耐えられません。気も狂わんばかりに待ち焦がれている者の悲しみを和らげてください。」

ヨハネスは、そういった自らの想いをクララに伝えるべく、自作の弦楽六重奏曲第1番：作品18aの、第2楽章をピアノ独奏用に編曲し、クララの41歳の誕生日にプレゼントした。それが一番人気の次の名作である。

主題と変奏 二短調 作品 18b

クララと出会ってから7年後の1860年、ブラームス27歳の作品である。

ビオラとチェロを追加した重厚な弦楽六重奏の響きが、そのままピアノの低音を強調した編曲にも活かされている。クララに対する熱く深い想いが封じ込まれているかのようだ。

***** <<https://ameblo.jp/wxmx07589/entry-12446116381.html>> *****

この逸品は、ヨハネスの「バッハ伝家の宝刀＝変奏曲」への興味と技法が芽吹いており、やがて渾身の傑作『交響曲第4番第4楽章』に結実していくのである。

いったん故郷ハンブルグに戻ったブラームスは、デトモルトの宮廷音楽家という職について、3年間を費やした。その時の主な仕事は、合唱隊の教練と育成だった。これに端を発して、彼の合唱を組み込んだ作品が産まれていく。

そして、ゲッティンゲンで1957年の夏を過ごした時に、指導したソプラノ歌手のアガーテ・フォン・シーボルトという娘に魅かれてしまう。彼女は、ヨアヒムが評した「アマーティの声」の持ち主でもあった。アマーティ (Amati) とは、16世紀に、イタリア北西部のクレモナで活躍したヴァイオリンの製作者一族であるが、ヴァイオリンニストのヨアヒムがその奏でる香気あふれる音色に、アガーテの声をなぞらえた。ヨハネスは彼女に婚約指輪を贈呈するほど相愛の関係に陥り、そろそろ結婚するのではないかと周囲を騒がせたが。そんな熱愛の最中にクララが、ヨハネスと一緒に夏を過ごしたいとして訪れたが、伶俐なクララは二人の仲を悟り、ヨハネスに背を向けて戻ってしまった。

それから、この^{ぼくとつ}朴訥な男のアガーテへのプロポーズの手紙における、不用意な下りにより、アガーテは傷つき、離れていった。まさに、「泣きっ面に蜂」、「二重の不幸」というマーフィの法則が現実になったのである。アガーテは、クララに劣らないほど誇り高き乙女だったから、ヨハネスのうかがいの手紙

「しかし、僕は束縛されるわけにはいかないのです。貴女を抱きしめて貴女を愛しますと言う

ために、貴女のもとへ戻っていきべきかどうか、すぐご返事をください。」

という彼の慢心がアガーテには信じられなかった。どうして、彼女に選ばせるのか、遮二無二、求婚しないのか？ ということだったようだ。

[註] 江戸時代に鎖国状態の日本に来航し、シーボルト事件で有名なシーボルト医師の叔父の、孫娘がアガーテ・フォン・シーボルトにあたる。

デトモルトの街並み



<https://www.sendai-nct.ac.jp/natori/ertshien/SHIEN/members/koyama/ffb.html>

留学都市ゲッティンゲン

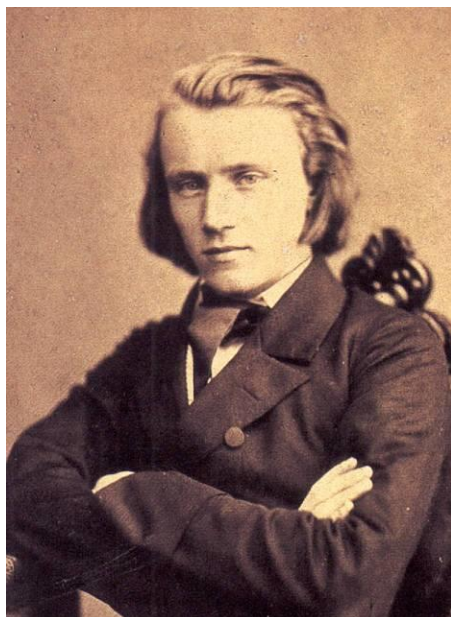


<http://bundestor.com/ryuugaku/stadt/goettingen.shtml>

そんな出来事があっても、ヨハネスの深層の心は、いつものようにクララとのよりを戻して、心情的に寄り添いながら、ドイツの各都市を彷徨した。

しかしながら、彼は、弦楽六重奏曲第2番作品36において、アガーテのスペルを第1楽章の第2主題に刻んで己れの感傷を記念したと伝えられている。この曲は、その想いに拮抗するほどの名作とはいえないが、佳作ではある。

若き日のブラームス(30歳)



https://ja.wikipedia.org/wiki/ヨハネス・ブラームス#/media/ファイル:Johannes_Brahms_1853.jpg

アガーテ・フォン・シーボルト



<http://birdwing.sakura.ne.jp/blog/2009/09/>

アガーテへの失恋は、ヨハネスを失望させたが、かえって彼の創作への意欲は燃えたぎり、

ピアノ協奏曲第1番二短調：作品15（26歳）

を書き上げた。初演は、1959年1月、ハノーヴァーでヨアヒム指揮により自らの演奏で行われたが、不評ではなかった。次のライプツィヒでの演奏は、3人ほどの拍手しかなく、完全に失敗した。クララにも泣き言の手紙を書いているが、このゲルマンの強靱な血を引いた男は、意外に冷めていた。

< ヨハネスの父がユダヤ人だったのではないかと、根も葉もない下司の勘ぐりがある。ワーグナーが「ユダヤ人のチャルダッシュ弾き」と、ヨハネスを揶揄したことから、噂にのぼった。ジプシーのハンガリアン・ダンス(チャルダッシュ)に嗜好を見出した頃である。彼はプロテスタントであり、カトリックにも抵抗なく声楽を作ったことで、否定される。ユダヤ教の祭祀に時間を割いたということは、聞いたことも読んだこともない。なによりも《ドイツ・レクイエム：作品45》を作曲・自演したことで自明となる。>

どんなに不評を買ったとしても、当時の聴衆の耳がヨハネスの楽曲の豪快な浪漫の香りにあふれた名曲を味わえる感覚を醸成していなかった、と私は想像している。とにかく、凄まじい

ヨハネスの咆哮が叫びをあげ、初めてこの世に出現した記念碑的な管弦楽曲と、確かに言える。題名と構成こそ協奏曲であるが、これこそ第一番目のシンフォニーと言って差し支えないし、くっきりとベートーヴェンの背中が観えるところに立ったにちがいない。

ハノーファー



<https://4travel.jp/travelogue/11055640>

ウィーン

もともと、ハンブルグで指導した女性合唱隊のベルタ・ファーヴァー（旧姓：ポルブスキー）に瞠目し、彼女からウィーンの様子を聞かされ、オーストリア訛りのベルタの^{なま}はつらつな話によっても、腰が退けていたヨハネスの興味が湧いた。彼は、シューマンが諦めたウィーンについては、ベートーヴェンの足跡が聴こえるこの街に、憧憬がなかったといえは嘘になるだろう。

たかがウィーン、されどウィーンである。

チャンスをうかがっていたにちがいない。それと、ベートーヴェンさえも駆出しで乗り込んだのだから、自分には実績があるという自負が勇気づけたものと思える。

1860年、ハンブルグに戻って、郊外のハムという静かな町に居を据えたヨハネスは、次の名曲などを世に出した。

ピアノ四重奏曲ト短調：作品25

この曲の第4楽章は跳ねるように明るく“Rondo Alla Zingarese（ジプシー風ロンド）”の指定よろしく極めて賑やかである。



ウィーン：シェーンブルン宮殿

<https://ryugaku.net/country-details/austria-info/vin-info>

1862年、ようやくウィーンに進出した。ベルタやその友人であるウィーン宮廷歌劇場の歌姫ルイーゼ・ドゥストマンらの歓迎により、ウィーンの音楽界に紹介されて溶け込むことができた。即座に、ピアニストのユーリエウス・エプシュタインを友人にできた。彼の紹介により、ヴァイオリンニストのヨーゼフ・ヘルメスベルガーは、このピアノ四重奏曲ト短調を聴いて、

「これこそベートーヴェンの遺産だ」

と叫んで、真っ先にヨハネスの真価を認めた。デビューは、ヨハネス自身のピアノによりこの曲を披露して、ウィーン市民から喝采を浴びた。

デトモルトにおける合唱隊の教練と指揮に造詣を深めたヨハネスの経歴が功を奏した。オ

ッティーリエ・ハウアーという乙女の歌手に魅かれてしまったが。

意外にも、この若者は乙女たちとの付き合いに粗漏がなかった。ただし、特定の女性に本気になると、いつも内面にこもって^{じくじ}忸怩たる精神状態に落ち込んでしまう。だから、あの鋭い洞察眼をもつクララにも判別がつかないときがある。クララ自身に向いているときは、さすがに気づいて、かろうじてかわしてきたが。このため、やがて、ヨハネスの心に、アガーテ以来、深々とした傷を残す事件が起きる。

もともと1860年以降は、27歳、気鋭のヨハネスの創作活動がにぎわい出していた。室内楽が中心であるが、それらの中でも取り上げるべきものは、変奏技法が熟した次の逸品である。

パガニーニの主題による変奏曲第1番&第2番：作品35

パガニーニの激しさに劣らず、挑戦的できわめて激情的であっても、浪漫性ゆたかな名品に仕上がっている。リストの編曲版、ラフマニノフのピアノと管弦楽による《パガニーニの主題による狂詩曲：作品43》などと比較しながら聴くと、作曲家の特徴が現れて、興味は尽きない。特に、後者では、あの『第18変奏』は数多のポピュラー音楽で流用・愛用されてきて、私たちの耳には郷愁とともに、いつの間にか刻まれてしまっている。

<https://enc.piano.or.jp/musics/212> %%%%%%%%%%

1862年、ブラームスは生活の本拠をウィーンに移した。彼は、ここで出会った名ピアニスト、カール・タウジヒ（1841～1871）の技巧に、完全に魅了された。彼はブラームスと正反対と言えるくらいに性格が違っていたが、二人はすぐに意気投合し、一緒に演奏や議論を楽しんだ。

ブラームスはシューマンの作品3と作品10、リストの〈パガニーニの主題による練習曲〉の先例をみるにつけ、自分もそういう練習曲をつくってみようとも考えていた。そこに、このタウジヒが、**パガニーニの主題による華やかな変奏曲**を書かないか、とブラームスに提案したことが、作曲の動機となった。

この作品35の変奏曲は、各14の変奏からなる2冊のものとなっており、合計28の変奏がある。各変奏ごとに演奏技巧上の問題をつぎつぎと提示しており、技巧的に至難ともいえる練習曲である。ブラームスは、この曲に、「精巧な指のためのピアノの練習曲」と記した。主題は2冊ともパガニーニの無伴奏ヴァイオリンのためのカプリス第24番イ短調からとられている。

リストの弟子、ローゼンタールがこの曲を演奏するようになったとき、リストは、「このブラームスの曲は、自分のよりよい」と言った。しかし、さらにつづけて、「だが自分のはこれよりも10年以上も前につくられているのだ」と付け加えることも忘れなかった。また、ローゼンタールが、これら28曲は続けて演奏されるべきものかどうかブラームスに問うたところ、

ブラームスは「第一冊のあと休みをとればよい。しかしそれでも聴衆が満足していないようであれば、次の第二冊に移ればよい」と冗談を言ったということである。

初演は、チューリヒで 1865 年 11 月、ブラームス自身によって行われ、また、1867 年 3 月、ベルリンでタウジヒが演奏を行った。また、作品は、ブラームスの弟子、エリザベート・シュトックハウゼンに献呈されている。

<<https://enc.piano.or.jp/musics/212>> %%%%%%%%%%

30歳になったヨハネスに信じられないほどの勧誘があった。それは、ウィーン・ジングアカデミーという合唱協会の指揮者への就任である。さっそく、それに身を投じて、バッハのカンタータや《クリスマス・オラトリオ》など古典的合唱曲を採りあげて、喝采を浴びたが、なぜか、故郷ハンブルグへの里心が起きて1年で辞めてしまった。

ハンブルグ管弦楽団の指揮者という定職に志望を持っていたとも言われている。老いた母親の面倒を看たかったようだ。が、生涯、3回ものチャンスがあったのにハンブルグ市は、ヨハネスを無視して他の音楽家を選んでしまった。恨みがましい想いに苛さいなまれたという。

私は全く別の説を持っている。彼は、ウィーンの合唱協会：ジング・アカデミーさえ、次のシーズン3年契約延長も蹴った。ということは、定職の嫌味、すなわち絶えず役人のように縛られること。生粋の放浪者ヨハネスは芸術家であった。風見鶏をみながら気ままに日々を過したい。創作への刺激を受けて意欲を溜め込んで、作品をつくりたい。その出版や演奏会出演料で十分に暮らせる。だから、定職に就いて落ち着くと日々の職務に引きずられ、それが出来ない。そんな感慨があったにちがいない。

でも、故郷ハンブルグにおいては、錦を飾りたかったのであろう。

ウィーンの音楽に係る著名な組織は、次のようになっていた。

ウィーン楽友協会（ムジークフェライン）

1812年に設立された、ウィーンにあるクラシック音楽関係者による団体（ウィーン楽友協会）およびその本部の建物。ムジークフェライン・ザールと呼ばれる大ホールは、通称「黄金のホール（ザール）」と呼ばれ、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地として知られる。



楽友協会 - 黄金大ホール <<https://www.mozart.co.at/musikverein-jp.php>>

特に、ブラームスは1872年：39歳から1875年：42歳までの3年間協会主宰のコンサートで指揮棒をとり、小ホールで自身の数々のピアノ作品の演奏を行なっている。このため、1937年に彼の功績を称え、小ホールが「**ブラームス・ザール**」と名づけられた。

- ・ウィーン楽友協会ビルと大ホールの経営
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が常用
歌劇やニューイヤー・コンサートの開催
- ・ウィーン楽友協会小ホール＝ブラームス・ザールの経営
- ・ウィーン交響楽団： 1900年、フェルディナント・レーヴェによりウィーン演奏協会管弦楽団として設立された。ウィーン交響楽団の主な仕事はコンサート演奏である。ウィーン交響楽団は、楽友協会とコンツェルトハウスで月4回の定期公演を含めてウィーンだけでも1年に約80回のコンサートを行っている。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

オーストリア帝国王立宮廷歌劇場（後のウィーン国立歌劇場）のオーケストラとして、1842年3月28日にレドゥーテンザールにて行われた「大コンサート」をもってウィーン・フィルの誕生とされてきた。帝国王立宮廷歌劇場の楽長で作曲家でもあったオットー・ニコライが指揮した。彼が創立者とも言われている。

現在は、ウィーン国立歌劇場のオーケストラであるウィーン国立歌劇場管弦楽団（6管編成・150名ほど）の団員のうち、入団を認められた者が自主運営団体たるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団（5管編成・120名ほど）を構成する。

ウィーン・ジングアカデミー

- ・ア・カペラ合唱団
ア・カペラ（イタリア語：a cappella 《礼拝堂ふうに》）楽器の伴奏を伴わない合唱曲。またはその様式。バロック音楽におけるパレストリーナなどの宗教的合唱曲など。今では、無伴奏の歌唱や合唱がア・カペラと呼称されている。
- ・ウィーン・フィルやウィーン交響楽団との共演

なお、現在のウィーンでは、一晩で同時に、歌劇や合唱付管弦楽曲の演奏会が最低三つほど催すことが出来るといわれている。つまり、常勤の演奏家や歌手以外に、臨時招集に応じられるプロ級の一流演奏家と一流歌手が市民の中に、その数倍も居るということである。凄まじい音楽の都である。そんな音楽底無し都のトップ・レベルの「ジング・アカデミー」指揮者に抜擢されたヨハネスは、数年後にウィーン音楽界の総支配人ともいべき**楽友協会の総監督**に就任するのである。こんな名誉は有史以来、初めてのことである。でも、3年で辞めてしまった

のだけれども、ウィーン市民は、後年、ヨハネスの膨大な貢献を讃^{たた}えるため、楽友協会小ホールに「ブラームス」の名を冠したのだ。そんなことに生前も死後も涙^{はな}にもかけないのが、ヨハネスという大家であることを忘れてはいけない。

彼が、両親への心情を除けば、真に心からワクワクするのは、幾つになってもクララに接する時だけであることは、誰も否定できないにちがいない。

バーデンバーデン

それまで、実母が居るベルリンに住まっていたクララは、静養にでかけたバーデンバーデンが一目で気に入った。フランス国境に近くて、ライン河のほとりにあり、ドイツで最も有名な保養地であるそこに、1862年（43歳）、さっそく小さな邸宅を取得した。住所は光^{リヒテンタール}の谷街であった。小さくとも、グランドピアノが3台もあり、7人の子供たちが悠々と暮らせるほどの広さがある。3ヶ月に亘る夏季をここで過ごし、10月からおおよそ3千万円以上も稼ぎ出す演奏旅行に出かけ、来年の6月までヨーロッパ中を駆け巡る。そんな生活周期に一番の拠点になって、クララにとっては願ってもない安心して休養できる場所でもあった。留守番は、長女マリエ：21歳と次女エリーゼ：20歳が担い、他の子どもたちは寄宿学校や託児先で棲ごして、夏には全員集合する。温泉も出たから、日本でいえば芦ノ湖のような風光明媚な避暑地でもあった。

さっそく、1864年夏、31歳のヨハネスがクララに招請され、待ってましたとばかりに嬉しそうにやってきた。一見して、彼もバーデンバーデンに惚れ込み、クララの邸宅から歩いて10分ほどの高台に自分の別荘を借りて、絶えずクララ邸に出入りして、ヨハネスおじさんとして子供たちと触れ合い、じゃれ合って避暑の休暇を満喫した。

そして、思索^{ふけ}に耽る散策は、彼の創作の構想と気魂を存分に蓄えた。しかも、いろいろな分野の名士が、夏には集まることから、口下手なヨハネスでも自然に社交の場に浴することもできた。

ヘッセ伯爵夫人

ロシアの小説家ツルゲーネフ

声楽家ポーリン・ヴィヤルド（パリ以来のクララの親友）

ピアニストのアントン・ルービンシュタイン（ロシア訪問時のクララへの接遇）

ワルツ王のヨハン・シュトラウス

画家のフォイエルバッハ

テオドール・キルヒナー（シューマンの門下生）

ストックハウゼン

フロレンティン弦楽四重奏団

小説家のファニー・レワルド

40歳頃のクララ



<https://ja.wikipedia.org/wiki/クララ・シューマン>

カールスルーエ歌劇場の指揮者：ヘルマン・レヴィ（ヨハネスに脱帽、敬服）
銅版画家・写真家のユーリエウス・アルガイヤー
ヴァイオリニスト・指揮者のヨーゼフ・ヨアヒム（ヨハネスの親友）

等々

こういった避暑地の名士たちは、それぞれの都合で、クララ邸に午後4時ごろに訪ねてきて軽いクッキーとコーヒーでもてなされた。水曜の夜の集まりは、客自らの室内楽や声楽の披露もあり、相互の情報交換や芸術談議に花を咲かせた。正に、クララ好みの夢のような社交場と化して、子供たちも甲斐甲斐しく接待した。誰からも言われぬのに、当然のようにヨハネスもホスト役に努めた。というか、ヨハネスに対しては、クララ邸の食卓に常時、ヨハネス分が用意されていたように、クララと子供たちから、家族の一員として扱われていたのである。

保養地バーデンバーデンの位置は、次のとおり。



ヨーロッパに数ある温泉保養地の中でも、由緒ある指折りの保養地であるバーデンバーデン。その歴史は、紀元前80年まで遡り、この地を占領していた、入浴がこよなく好きなローマ人(軍)により次々と温泉浴場が造られた。貴族や作家、音楽家なども優雅に過ごしたという。

バーデンバーデンは、南ドイツのバーデン＝ヴュルテンベルク州に属す都市で、温泉地としてもよく知られている。バーデンとは、ドイツ語で「入浴」という意味であるが、オーストリアやスイスにもある「バーデン」という同じ名前の温泉町と、「バーデン地方のバーデン」として区別を付けるためにダブらせたという。

温泉施設やホテルなど観光客を迎える施設が整いだした18～19世紀頃にもなると、世界中からの貴族や文化人がこのバーデンバーデンを訪れるようになった。その中には、ビスマルク、ヴィクトリア女王、ナポレオン3世、それからドストエフスキーなども滞在したといわれている。

<https://wondertrip.jp/92081/>



<https://sonarmc.com/wordpress/site01/files/2018/03/baden-steves.jpg>

ブラームス・ハウスでバスを降りて、前方へ進むと右側にクララ・シューマン・プラッツがある。このクララ・プラッツから左後方を見ると少し高台に建っているのが写真でお馴染みのブラームス・ハウスである。

クララ・シューマン・プラッツ (現)



ブラームス・ハウス (現)



<http://www.nakash.jp/opera/1997dokuon/21badenbaden.htm>

ユーリエ・シューマンの婚姻

原田光子著『クララ・シューマン、真実なる女性』より

1868年秋、クララの三女ユーリエ（24歳）は、イタリアの貴族：ヴィクトル・ラディカッティ・マルモリット伯爵から求婚された。彼は再婚であるが、クララゆずりの、ユーリエの水も^{したた}滴る美貌に魅かれたそう。クララは、小さい時より病弱だったユーリエの行く末に心を痛めてきたが、相手の熱心さに押され、ユーリエの覚悟を聞いたうえで、1869年夏、正式な申込み書簡を受け取った翌日に承諾してしまった。クララの記事には、「私の胸が疼いたのを神は知り給う」と記された。

当然とはいえ、ヨハネス（36歳）には事前に相談しなかった。ヨハネスは、もともとクララに生き写しのユーリエに男の情愛が芽生えていた。ユーリエと一緒にいるときには、他の娘達には向けたこともない「優しい眼」が輝いていたという。そうしたことは、数年前から続いていた。

ところが、クララは自分の不安をヨハネスに告げて慰めて欲しかった。真っ先にユーリエの婚約を報告した途端に、黙って聞いていたヨハネスは、ろくに挨拶もせず黙って帰ってしまった。「彼は思いも寄らなかった様子で、彼はひどく狼狽した。」とクララの記事につづられている。

「1869年7月16日＝ヨハネスはすっかり変わってしまった。顔もろくに見せなくなり、たまに来て一言二言いうのみで口をきかない。以前には特に優しくしていたユーリエに対してもその調子である。あの娘を愛していたのだろうか？ヨハネスは結婚を考えてみたこともなく、ユーリエもその意味で彼を慕ってはいなかったはずだが……」

同年9月に町の教会で結婚式が挙行された。ヨハネスは何もなかったように祝福したという。ユーリエの妹のオイゲニーが記事につづった記述は、ユーリエの容姿が見事に再現されている。

「まるで空のように青い彼女の目、長い睫毛に囲まれた美しい目が、今も見えるような気がする。彼女の髪は絹糸のように光沢のある金髪で、白く澄んだ額をかこみ、形のよい鼻と唇の細やかな線、それらを見る時は心から感嘆せずにはいられない。気品のある輝くような面影と、彼女の愛らしい気質、彼女の敏感な心について言葉で言い表すことはどうしてできない。」

しばらくして、クララが秋から冬にかけての演奏旅行に出かける頃、けたたましく玄関の呼び鈴が鳴らされて、開けた途端にドカドカと2階のクララの部屋に入ったヨハネス。静かに何

ユーリエ・シューマン



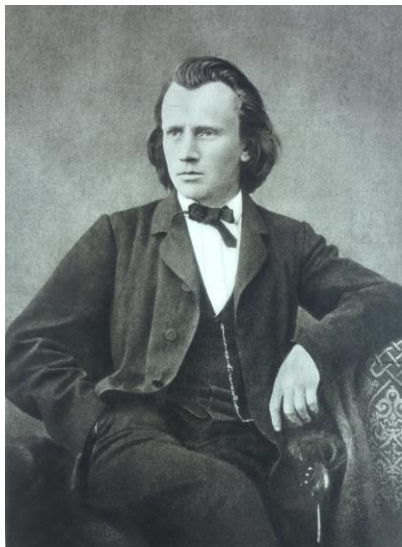
Julie Schumann, 1845-1872

<https://blog.goo.ne.jp/hirochan1990/e/62565c0a466f6c9bedbdd>

5bb9959b6db

か話しをして、ピアノを弾く音が聴こえた。敏^{きと}いオイゲニーは、その曲の風景を次のように日記に書いた。

ヨハネス・ブラームス：33歳



https://ja.wikipedia.org/wiki/ファイル:Johannes_Brahms_1866.jpg

「まもなく私たちの耳には、深く人の心を揺り動かす荘厳な音楽が聴こえてきた。私たちはしばらくじっと聴いていた。やがて、ヨハネスが帰り、母がひどく興奮して降りてきた。ヨハネスは、ゲーテの『ハルツ紀行』から歌詞を採った、アルトと管弦楽のためのラプソディを初めて彼女に聴かせた。彼がこの曲を彼の結婚の歌だと言った、ことを母は呟いた。」

原田光子著『クララ・シューマン、真実なる女性』より

私には何も言えないが、「義理と人情」にゆれたヨハネスの、血も滴^{したた}る心の傷が見えそうである。情念は身勝手である。一方、ヨハネスの頭にある《人の道》たる倫理観念は強すぎた。

アルト・ラプソディ 作品53

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~lyricssongs/TEXT/S5495.htm>

詩：ゲーテ（冬のハルツの旅 1777） 曲：ブラームス

Aber abseits wer ist's?	だが離れたところに行く あれは誰だ？
Im Gebüsch verliert sich der Pfad.	茂みの中へ 道は消えて行き
Hinter ihm schlagen	彼の背後ではぶつかり合っている
Die Sträucher zusammen,	灌木の枝同士が
Das Gras steht wieder auf,	草は再び立ち上がり
Die Öde verschlingt ihn.	荒れ地が彼を飲み込んでしまう
Ach, wer heilet die Schmerzen	ああ 誰がこの痛みを癒してくれるのか
Des, dem Balsam zu Gift ward?	薬が毒へと変わってしまった者の？
Der sich Menschenhaß	人間の憎しみを
Aus der Fülle der Liebe trank?	愛の充溢からすら飲んでしまった者の？
Erst verachtet, nun ein Verächter,	初めは蔑まれ 今は人を蔑む者となって
Zehrt er heimlich auf	彼は密かにすり減らしているのだ
Seinen eignen Wert	自分自身の価値をも

In ung'nugender Selbstsucht.

満たされぬ自己愛のうちに

Ist auf deinem Psalter,

もしも御身の豎琴に

Vater der Liebe, ein Ton

愛の父よ 響きがあるのなら

Seinem Ohre vernehmlich,

彼の耳に届く

So erquicke sein Herz!

彼の心をよみがえらせ給え!

Öffne den umwölkten Blick

曇ったまなざしを見開かせ

Über die tausend Quellen

幾千もの泉が

Neben dem Durstenden

渴いた者のそばにあることを見せ給え

In der Wüste!

この荒野のうちに!

ゲーテの中篇詩「冬のハルツの旅」より、ちょうどその中間部分を取り出して（全11節中の5～7節。全体の4分の1ほどの分量です）管弦楽伴奏にアルトのソロと男声合唱による15分ほどの曲としています。ハルツ山地はドイツ中北部、ハノーファーとライプツィヒの間にあって、魔女たちが集まることで有名なブロッケン山もここに 있습니다。ゲーテはこの地方を1777年の11～12月にかけて旅行し、その際にこの詩も書かれています。ブラームスが取り上げなかった前半後半もここに上げたのと同じようなテイストの、荒涼たる自然の描写とそこを行く人間を見つめながらの運命の描写、そして神への賛美が延々と繰り返されますので、こんな風に切り出すのもまあ意味はあるのでしょうか。興味深いのは1794年にライヒャルトがブラームスとほぼ同じ6～7節を取り上げて独唱歌曲にしていることで、しかもこの歌曲、タイトルがなぜか「ラブソディ」とも呼ばれているのです。他にはこの詩を歌曲に取り上げている人も居なさそうなことから、ブラームスの選択もこの歌曲に影響されているのかも知れません（ちなみにブラームス作品の作曲は1870年でした）。

歌詞で触れられている男の描写が妙に突き放されている感じがするのが何となく妙な感じもしますが、これは詩の解説によると（潮出版社のゲーテ全集1 山口四郎氏の訳註より）、このハルツ旅行のひとつの目的に、彼の作品で若者に大センセーションを引き起こした「若きウェルテルの悩み」にかぶれたいわゆる「ウェルテル病」の患者のひとりの若者を励ましに行ったということがあのだそうで、ここに描写されているのがそんな若者の姿だ、ということのようです。ブラームスの取り上げた部分では最後の神への祈りもそんな若者のためにゲーテがしているということになりますでしょう。

ブラームスのつけた曲が全体に地味なのであまり印象に残りにくいところはあるのですが、**しっとり**と**深みのあるアルトのソロが、Ist auf deinem Psalterと歌い始めるところから安らかな響きになって、弱音で支える男声合唱がここから入ってきて美しく曲を盛り上げていくところ**はなかなか感動的です。（2016.01.09 藤井宏行）<http://www7b.biglobe.ne.jp/~lyricssongs/TEXT/S5495.htm>

この名曲は暗鬱である。どうして有名になったのか解らない。しかし、中間部から流れるようなアルトの彷徨う歌唱を聴くと、その揺蕩う声にはヨハネスの深いロマンを湛えた悲しみが胸に染みてくる。

これを聴くたびに、男の私は、次のようにヨハネスの胸の想いを代弁したくなる。

どうして、僕はユーリエを嫁に欲しいとクララに言わなかったのか。いや、言えなかったのか。どうして、クララは僕に結婚して落ち着いてはどうかと、何度も手紙で言ってきたのに、僕の心がユーリエに憧憬していることを悟ってくれなかったのか。

しかし、僕は《人の道》に反して、若いころ、師匠の妻女が憔悴したときに、その心の隙間に寄り添った。狂おしいほど悶えた過去があり、それがおとなしくなっても、いまだに消えてくれない。さらになお、その惚れた未亡人の娘に恋するとは、僕は畜生道に嵌り込んでいるとしか思えない。

もし、クララがユーリエと一緒にあってはどうかと僕に訊いてくれたなら、どんなにか嬉しく、問題はすべて霧消したのだが。果たして、実際、僕は素直に応じられたらどうか。

やはり、僕の破裂しそうな魂は、音楽に吐き出すしかないのだ。

彼ヨハネスは、すでに、ユーリエの婚約以前の1869年春に大作「ドイツ・レクイエム」を完成して自ら指揮棒をとり、大成功でドイツ楽界に激震を走らせていた。が、バーデンバーデンの女たちには、どこ吹く風のものであった。古今東西、家族という小さな集団は、その中の一人の男の天を突くような成果が、未来永劫、音楽史を飾るマイルストーンになるとしても、本気で気付こうとしないものなのかもしれない。いわゆる日々平穩が一番なのである。

クララすら、である。「ドイツ・レクイエム」を彼女は、長女マリエとともに直にブレーメンでの初演を聴いて、絶大な称賛の渦に巻き込まれたはずなのに。仮に、彼とユーリエと一緒にしたら、クララの娘はブラームス夫人として永遠に歴史に刻まれるのである。そのような夢想もクララに皆無だったとは言い切れまい。しかしながら、二十歳のころから一途に自分に慕情を向けてくるヨハネス、芸術家としても大成している逞しいヨハネスは、クララの心に棲み込んでしまっていた。娘に恋情が湧いていることは、たとえ判ったとしても“邪な”として本能的に払いのけてしまうにちがいない。

一方、ユーリエ自身はどうも優柔不断の性分であったようだ。外見を除くと母に似ず、鋭い審美眼と強靱な意志力のかけらも無かった。生きるということは、美を堪能できる感力を燃料にして、何かのたために行動しようとする胆力が無ければ始まらない。巨しく成長した芸術家ヨハネスに感動することがなかったのであろう。感動とは、感じて動くと言え。動けないのは、単なる感激でしかない。審美眼とはそういうものだ。

だから、病気に弱いユーリエの生命力は余計に衰えていったのだろう。嫁いでから2子を生したが、27歳で結核により夭逝してしまった。まさに、美人薄命だったと言える。

ドイツ・レクイエム 作品45 (35歳)

デトモルトにおける合唱団の教練と育成、故郷のハンブルグにおける合唱団の指揮、そして、ウィーンの合唱協会：ジング・アカデミーの総監督と演奏会の指揮などを経たヨハネスは、存分な声楽曲の知識と経験を積み上げた。

そんな時に母クリスティアーネが76年の生涯を閉じた。1965年夏、傷心のヨハネスは、第二の故郷ともいべき明るく若い命に満ち溢れたバーデンバーデンにて、哀惜に淀んだ魂を癒した。

そして、放浪癖にしたがうように、秋から演奏旅行に出かけた。ドイツとオーストリア国内を始め、スイス、ハンガリーからデンマークまで足を延ばして、クララと競うようにコンサート出演に明け暮れた。

1866年、33歳のヨハネスは、キルヒナーという熱烈な支援者に誘われ、スイスのヴィンタートゥア（チューリッヒ近く）に腰を落ち着けた。シューマンの死以来、10年も持ち続けていた鎮魂曲への意欲が、母の他界により加速され、静謐な田舎町を散策しながら「ドイツ・レクイエム：作品45」の作曲に埋没できることになったのである。

ヴィンタートゥア



<https://www.takeachef.com/en-ch/private-chef/winterthur>

この鎮魂曲は、いわゆるラテン語で書かれた伝統的なものではなく、ヨハネスがドイツ語の新約聖書から要所を抜粋して聖歌詞にした7部に基づいているので、ドイツ・レクイエムと名付けられた。

一気に書きあげて、いつものようにピアノ版も作成し、愛しいクララに送って診断をねだった。公式的な初演は、ウィーンではなくブレーメンに定め、1868年4月、自ら指揮をすることにした。招待したクララがなかなか着到しないので、ヨハネスは苛々した。遠くのバーデンバーデンからの長旅でようやく上演日に間に合い、客席の彼女を見たヨハネスはほっと溜息をついて、演奏を開始した。やはり、ロベルトへの限りない哀悼を込めたこの曲こそ、シューマン夫人に聴かせたいという想いは、この局面に集束したのであろう。結果は、会場のブレーメン大聖堂に満ち溢れた聴衆の熱狂的な喝采を浴びて、大成功だった。次の年には、ドイツ中で20回も上演されたそうだ。

1868年(35歳)に完成し、翌年にヨハネス自らの指揮で初演された。全7曲で構成され、歌詞は、ルターによるドイツ語の新約聖書・旧約聖書からのブライムス編纂による。

- 第1曲 「幸いなるかな、悲しみを抱く者は」
第2曲 「肉はみな、草の如く」
 第3曲 「主よ、知らせめたまえ」
 第4曲 「いかに愛すべきかな、汝のいる所は、万軍の主よ」
 第5曲 「汝らも今は憂いあり」
 第6曲 「我らここには、長しえの地なくして」
 第7曲 「幸いなるかな、死人のうち主にありて死ぬる者は」

この曲を全部聴くと、75分かかる。

死者への敬虔な祈りと哀悼を深々と湛えた、さすがに重厚かつ荘厳なレクイエムである。オーストリアの哀切きわまりないモーツァルト、フランスの清澄なフォーレ、豪華絢爛たるイタリアのヴェルディ、それぞれのレクイエムと聴き比べれば、ブラームスの特徴は歴然とする。

もっとも荘厳な、第2曲の歌詞は次のとおり。

第2曲 「肉はみな、草のごとく」

肉はみな、草のごとく

人の光栄はみな

草の花のごとし。

草は枯れ

花は落つ。

かく今は耐え忍べ、愛し
 き兄弟よ、

主の来たらんとするとき
 まで。

視よ、農夫は待つなり、
 地の尊き実を。

また耐え忍ぶなり、
 朝の雨と夕の雨を得るま
 で。

かく耐え忍べ。

古代ローマ時代以来の荒々しいゲルマンの心魂が、ルター
 の宗教改革の精神を引き継いだバッハのカンタータな
 だによって錬磨され、ヨハネスに至ってこの曲のとおり

ヘルベルト・フォン・カラヤン
 (1908-1989)



総花を咲かせた。近代ドイツ人の祈りがしみじみと伝わってくる。だから、現在はもうドイツの国歌並みと言えるであろう。

私は、余り聴いて来なかったが、この巡礼に当たりこの鋭鋒は迂回できないと悟り、思い切って正面から激突した。激突とは、50回以上、聴くという意味である。そして、カラヤンの名盤（1964年録音）に邂逅したのである。しかも、デジタル・リマスタリングしたプラチナSHMのCDで再発売されたものだから、もともとの精緻な録音がさらに磨かれて凄まじい音質になった。百人ほどの合唱団の大音声でさえ歪まない。ドイツ・グラモフォンと提携したユニヴァーサル・ミュージックがそれを叶えた。もともと、名盤中の名盤レコードだったらしい。カラヤンは数回、“ドイツ・レクイエム”をレコーディングしているが、この録音は、なんとベルリン・フィルを引き連れ、ウィーンのムジーク・フェライン・ザール（楽友協会大ホール）に乗り込んで採録したので、「黄金のホール」も含めた音響ソノリティはこの世のものとは思えない。カラヤンが惚れたことも納得してしまう。

40歳頃のブラームス

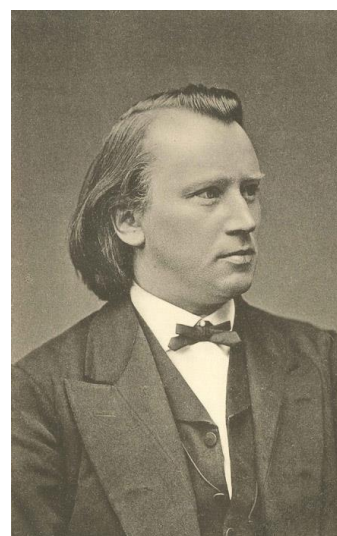
終の棲家

1871年、38歳のヨハネスは、ウィーン定住の腹を決めて、カールスガッセ4番地のアパートの一室を買取った。独身者の一人暮らしとしては、広めの部屋だった。当然ながら、ピアノを置いて弾けるほどのスペースがある。現在の日本のように、薄っぺらな仕切りと、飛び跳ねれば揺れそうな床・天井ではない。がっしりとして、ピアノ音を吸収・遮蔽できる剛性をもった造りである。

カールスガッセ4番地のアパート(現在)



<http://www.kagemarukun.fromc.jp/page005o.html>



<https://www.cnplayguide.com/keyword/kwdidx.aspx?KeyCode=12195>

彼の定住の背景には、『ドイツ・レクイエム』などの成功と、亡くなったユーリエへの忸怩たる悔悟に、ケリをつけたいという気持ちがあったのであろう。それよりも、ウィーンへの愛着に加えて、交響曲の作曲

という大きく重々しい課題への飛翔を念頭に、腰を落ち着けたといっても良いかもしれない。

この「カールスガッセ4番地」は、彼が他界するまで、終の棲家となった。ただし、放浪癖は休むことなくオーストリア、ドイツ、ハンガリー、スイス、イタリアへと、演奏旅行と保養・作曲を兼ねて続けられる。特に、イタリア旅行にはヨハネスの好み色が濃く反映されたという。

***** <http://www.kagemarukun.fromc.jp/page005o.html> *****

ブラームスの部屋について、彼の弟子グスタフ・イェンナー Gustav Uwa Jennner(1865～1920)は以下のように回想しています。

「ブラームスはカールスガッセ四番地の最上階〔四階〕、八号室(三部屋分)に住んでいた。入るとまず寝室に足を踏み入れる。これはお客が主人の寝室を通るのが日常茶飯事という、ウィーン風のひどい造作で、「客が恥ずかしくなければ、気にすることもない」ということらしい。ベッドの上には、J・S・バッハの肖像画。ガラス扉をぬけると、そこが質素な家具のある居間で、グランドピアノと書き物机が置かれていた。一番奥の部屋には、楕円形をした有名なシューマン夫妻の肖像画が掛かり、それにはブラームスに充てた達筆の献辞があった。それから仕事机と、壁側の書棚。通りに面する居間と書庫の窓は年中閉められ、反対側にある寝室の窓は昼も夜も開けっ放しで、そこからウィーン工科大学の本校校舎が見えた。」(天崎浩二編・訳、関根裕子共訳『ブラームス回想録集 3 ブラームスと私』く音楽之友社、2004年10月)225頁)

***** <http://www.kagemarukun.fromc.jp/page005o.html> *****

交響曲第1番 作品68 (43歳)

ヨハネスにとっては、超難産の作品である。29歳(1862年)のとき、クララが弾いたという第1楽章のスケッチから始まり、それを棚上げしたまま、ようやく43歳(1876年)で、一挙に完成したのであるから、14年間も何をもがいていたのだろうか。

一つは、35歳のときの『ドイツ・レクイエム：作品45』の大成功により、彼の地位はドイツ楽壇のトップ・レベルに押し上げられてしまったこと。二つ目は、その具体的なものとして **ウィーン楽友協会の芸術総監督** に推挙されて就任したことが挙げられる。1872年から3年間、その職務を全うした。音楽家としては至高の名誉であり、正に39歳でも、巨匠と呼ばれることに相応しくなったのだ。

すなわち、何も好き好んでベートーヴェンに挑む意欲なぞどうでもよい。あくせくと稼ぐ必要もない。そんな気持ちになっていたのであろうか。創作は、追い詰められた心の動機、あるいは心魂への外部刺激があって、解き放たれた自遊空間がなければ始まらない。だから、ヨハネスは、他の音楽家から垂涎の(よだれが垂れそうな)的になっていた楽友協会の総監督を3年で退いて、俗世間のしがらみから逃れた自由な休養と散策を求めた。それが、1876年夏、ドイツ北方のバルト海のリューゲン島ザスニッツにおける保養であった。

そして、ようやく『交響曲第1番：作品68』が産まれたのである。この名作から、私たちのようなクラシック愛好家は、ブラームスの名が脳裏に鮮明に浮上する。なんと、このブラ1が無くとも、

彼は頂点に立ってしまっていたことを、音楽史を紐解くと自然に判ってくる。この現象の意外中の意外に驚かざるをえない。人気とは、時代の風向きにより、本人にとっては僅かな成果でも祭り上げられる力が作用する、逆に、いくら孤高の名曲でも風潮に流されて、バッハの『マタイ受難曲』のように埋もれてしまう、ものであることを思い知らされる。

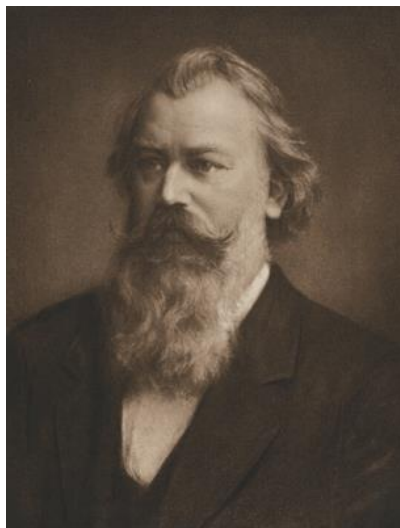
故に、ヨハネスは束縛のない環境における無私の思索において、己れの芸術的仕事をあらためて見つめ直したい、ということだったのであろう。

リューゲン島ザスニッツ(現在)



<http://ambassador.web.fc2.com/berlinbiyori/054/054.html>

髭を蓄え始めた
45歳頃のブラームス



<https://digitalcollections.nypl.org/items/510d47dc-81f0-a3d9-e040-e00a18064a99>

その結果、ブラ1のハ短調交響曲を、ベト5ハ短調「運命」にならって書き上げたと伝えられている。芸術家の強烈なライバル心が鎌首をもたげた。しかも激烈なマグマの噴火を伴って。ついに、ヨハネスは、クララへの思慕と、ベートーヴェンへの挑戦と、ウィーン随一の音楽家としての啓示、これら三つの魂を束ねた「咆哮」が雄叫びをあげたのである。

シャルル・ミュンシュというフランスの名指揮者がいた。フランス文化省が、1967年、役所化して覇気のないパリ音楽院管弦楽団を一新し、世界一流のオーケストラにしたいとして、米国で活躍中のこの指揮者を招請した。それまで、ボストン交響楽団の常任指揮者で、76歳の老後を穏やかに満喫していたのに。白髪の爺さんをわざわざ呼び戻した。そして、ミュンシュに管弦楽団再生の全権が与えられ、先ず、うだつの上がない管弦楽団の団員をほとんど(70%)入れ替えた。そして、それまで蓄えたオーケストラ演奏の知識と経験を惜しみなく吐き出して、楽団の教練に打ち込んだ。その結果、《パリ管弦楽団》が誕生したのである。1968年、渾身の魂をこめた最初の録音「ベルリオーズ：幻想交響曲」と「ブラームス：交響曲第1番」を世に出した。とたんに、小うるさい世界中の批評家どもに衝撃が走り、何も言えず、ひたすらに脱帽した。が、この年の11月、パリ管弦楽団を率いた米国ツアー中に心臓発作で、77歳ミュンシュは急逝してしまった。この2曲の録音は、まさに、彼の「白鳥の歌」になったのである。

「巨星^お墜つ」というが、蓋し、ブラ1の演奏のごとく劇的であった。

私は、このニュースを読んでいたが、チャイコフスキーに浮かれていた当時は、余り興味を持たなかった。でも、ミュンシュの「ベルリオーズ：幻想交響曲@ボストン交響楽団」の名盤は、20歳の時、がっちり聴き込んでいた。これについては、別途、巡礼していく。

このたびのクラシック巡礼を始めてから、どうもその当時の名録音を聴きたくて、またもや、リマスタリング復刻版のCD(Grand Slam)を手に入れて聴いたら、その怒涛のような轟絶なヨハネスの咆哮に、私の魂は打撃をうけて頭が朦朧としてしまった。学生時代は、カール・ベームのレコードを何度も聴いたのに、なんだ、このダイナミズムは？ 全然、スケール感が違う。恥ずかしながら、私は自分の巡礼の浅はかさを、今になって反省している。ヨハネスの響きのスケール感の^{おお}巨きさが、ミュンシュ盤により骨の髄まで染み渡った。

シャルル・ミュンシュ(1891-1968)



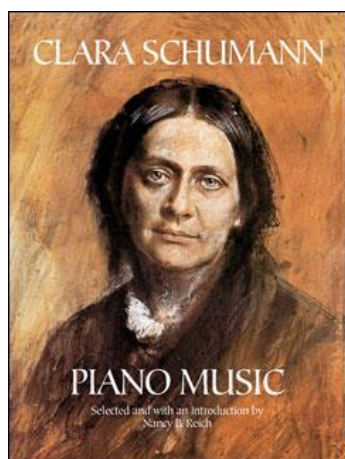
<https://www.amazon.co.jp/ブラームス-シャルル・ミュンシュ>

ヨハネスは彷徨がこよなく好きだったのに、どうしてかフランスには行こうとしなかった。スイス旅行でもドイツ語圏内で、フランス語のロマン地方までは足を延ばさなかったように、フランスを毛嫌いしていたと言う人もいるが、フランスからは好かれていたのだ。それをミュンシュとパリ管弦楽団が証明した。

クララの感想

57歳になって年老いたクララにとっても、衝撃的だったにちがいない。最初、ピアノ版でヨハネスが直に弾いて聴かせてくれた時には、ヨハネスの荒々しい演奏も影響して乱れて聴こえた。が、実際のコンサートでは、管弦楽のハーモニーは全くちがって響き渡った。

60歳頃のクララ



<https://item.rakuten.co.jp/gakufu-nets/209495/>

原田光子. クララ・シューマン、真実なる女性

1876年に第1交響曲のスケッチを持って、バーデンバーデンを訪れて来た折に、クララは期待していたブラームスの「閃き^{ひらめ}」が感じられなかったので「彼に告げるべきかどうか否か、長い間心の中で争っていた」と日記にあるように、クララはひどく失望した。しかし、翌1877年1月に、ゲヴァントハウスで演奏された時には、クララはその練習を終りまで聴かぬうちに、ブラームスに何も言わなかったことを喜んだのである。ピアノで弾いた時と、色彩豊かな管弦楽になった効果には大きな差があった。

『この交響曲は素晴らしい。靈感に満ちた導入部を持った終楽章は、ことにまれに見る深い印象を私に与えた。陰鬱な導入部、それが次第に素晴らしく巧みに明るくなり、ついに輝かしい終楽章の主題が現れる。あたかも長い陰鬱な冬の日の後の、春の息吹きのように、聴く者の心を暖めるのであった。』

しかし、クララは、第1楽章の第2主題と第3楽章のトリオの部分には不満で、その点をブラームスに率直に述べている。

原田光子. クララ・シューマン、真実なる女性

以下は、クララの胸の内にかかる筆者の想像である。

夫ロベルトのシンフォニーに比べたら、芸術的に遥かに超越していることに、クララは複雑な気分になったかもしれない。このヨハネスを予言したロベルトの炯眼に感服したことで救われた。100年、200年後も、この曲は世界中で演奏され、多くの聴衆に感動を与え続ける

ことは間違いない。ベートーヴェンに並んで、交響楽の記念碑的な位置を占めるであろう。これから、彼にどう接したらいいか判らなくなってくる。あの可愛らしいイルカが途轍もなく巨大な白鯨になって、ほっといても、私の傍^{そば}に寄ってくるのだから。私の小さなプールに納まるわけがない。どうしようか？ 困った。でも、彼は、私や子供たちにじゃれてくる。そんな雰囲気を、やはり、続けるしかない。刺激して暴れだしたら、バルト海すら波浪に洗われてしまう。

ピアノ協奏曲第2番 変ロ長調 作品83 (48歳)

クラシック巡礼の旅「悠久の響き」

2010.01.06 2014.02.03改 2019.05.20改 別当 勉



これを聴くと、遙かな遠い彼方に浮かぶアルプスを思いえがくのが、いつもの僕である。何という悠久の旋律なのか、50年の歳月をとおして巡礼してきても忘れたことはない。ブラームス渾身のピアノ協奏曲第2番である。これだけは、ベートーヴェンの五つの協奏曲、チャイコフスキーの第1番などとともに燦然と輝いているのだから、いくら称賛してもしきれない。

さて、演奏であるが、伝説的な名演となった、僕がショックで震えた組合せは、一徹バックハウスと冷厳ベームと気質のウィーン・フィルである。1969年当時はロウるさい評論家でもひたすら脱帽した。地上の神々の讚美とも云える。すなわち、バックハウスが80歳を超え、いつ神に召されるか判らないけど指が最後の力を残しているときで、長年の課題であるブラームスのシリーズ・ステレオ録音の実現というライフ・タイミングすれすれだった。

しかも、協奏曲ではめったにないカール・ベームが指揮棒を取り、バックハウス指定のウィーン・フィルが協演する組合せが成り立ったのだ。惚れ込んだとしか言いようがないほどの6回目の録音(1939～1968年)でもあり、クラシック業界全体で最多回数の挑戦であった。2019年の今までも例がない。デッカのプロデューサーも誉めてやりたい。

前置きが長くなった。このピアノ協奏曲は、ピアニストからみても超難技であるらしい。(おかしは、女性ピアニストは殆ど弾かなかったが、最近、フランスの若いエレヌ・グリモーのCDが出たので聴いたが、捨てる難い名演であった。)

構成は、めずらしく4楽章であり、交響曲を感じる。

何というおおらかで濃密な第1楽章であろうか。豊かなホルンのイントロを支えるように静かにピアノが登場する。そして、第一主題が力強く始まる。それから弦に煽られて展開するのであるが、見事な重厚さに高貴なピアノ打鍵のカデンツァ(独奏)もどきが、一切の汚濁を削ぎ落すように孤高の

頂点を目指す。

このピークは、剛直な浪漫が煮えたぎるように昇華していく。といっても、意味不明であろう。要するに、ブラームスの^{ほの}幽かな悲哀が、ピアノ打鍵のカデンツァ^{こつおん}轟音にかき消されるのだ。その情熱の盛り上がりは他に例が無いほど圧巻である。この場面は、現代のポリーニほどの巨匠でもバックハウスには及ばない。先のないバックハウスの最後力か、それとも、元来のバックハウスのダイナミックレンジの^{すご}凄さであろうか、これを引き出すベームの駆け引きの巧さか、現代のマエストロ達も技術的にも脱帽するに違いない

交響曲の構成

第1回『ルードヴィッヒの夢』からの再掲になるが、交響曲の構成は次のとおり。

ソナタとは（2）

ベートーヴェンのソナタなど

第1楽章： 総合(ソナタ形式)
第2楽章： アダージョ
第3楽章： フィナーレ(ロンド形式)

ベートーヴェンの交響曲など

第1楽章： 総合(ソナタ形式)
第2楽章： アダージョ
第3楽章： スケルツォ
第4楽章： フィナーレ(ソナタ形式)

もともと革新派ベートーヴェンの作品群では、典型的な楽章構成は上に掲げるように、彼はバージョン・アップさせた。これらは、以後の巨人たち、シューベルト、ショパン、リスト、シューマン、ブラームス、チャイコフスキー、ブルックナー、マーラーというそうそうたる作曲家に、すべて引き継がれていった。だから、音楽界全体で「楽聖」とも言われるのだ。しかもローマ建築に劣らぬ楽曲の構造について独自に練り上げたように、彼の恐るべき才能の一つである緻密さは、想像を絶する。(詳細は後述)

特に、交響曲においては、第3楽章メヌエットの代わりに、踊るような「スケルツォ：冗談」を導入して、曲の自由度を上げた。

例えば、初期のピアノソナタ第2番第3楽章[アレグロ・スケルツォ]は、ピエロのふざけたダンスみたいなので、そのおかしげな色合いを聴いてみよう。

試聴： ピアノ・ソナタ第2番第3楽章

9

カデンツァとは

協奏曲における独奏パートである。このため、初期は演奏者が自由に即興的に独奏して盛り上げたものである。ただし、ベートーヴェンぐらいから作曲家が作って用意するようになった。

全体を通じて云えることは、ピアノが管弦楽団の一楽器になりながら、^{どくだんじょう}独壇場も与えられたピアノ・シンフォニーというように^{とら}捉える人々も少なくない。

僕は、最近、ポリーニ盤を愛聴しているが、やはり物足りない。録音技術が30年以上の歳差があるのに、バックハウス盤の古臭さは全くない。ピアニスト年齢差が50歳あって演奏技術進化もあったはずなのに、その申し子である天才ポリーニでも超えられないのだから。後半生は、ベートーヴェンとブラームスしか弾かない、ピアノもベーゼンドルファーしか使わない、

オーケストラさえもウィーン・フィルとしか協演しない、バックハウス・ドメイン（意地）には、この協奏曲で完璧に頭が下がる。ベーゼンドルファーとは、ドイツのピアノ・メーカーであり、米国本社のスタインウェイ（製作はドイツ）と世界を二分する鍵盤楽器である。音色も、玉みたいなスタインウェイとは違い、ヒビの入ったサファイアみたいな感じで、低音はかすかに割れてハイ・ノートは輝いているから、慣れるとすぐに判る。ちなみに、硬い弾みが生命となるジャズの世界では殆どスタインウェイである。

そんなことよりも、感受性を磨く意志があれば、『バックハウスのブラームス』という千カラットのダイヤモンドが、たった2千円のCDで手に入ることを強調したい。

次の原田光子女史の著作における下りは、興味深く、クララとヨハネスとの関係あるいはピアノ協奏曲に関するクララの感慨を的確にあらわしているのではないだろうか。

原田光子. クララ・シューマン、真実なる女性

ブラームスのピアノ曲、室内楽、歌曲等は直接ピアノで味わえるので、クララはことに深く理解したようである。すでに作曲界の権威者になりながらもブラームスは常に彼女の意見を尊重していた。ブラームスは一見、他人の意見等はいかにも無視し勝ちな性格に思われながら、あらゆる楽聖の中で最も謙遜な態度で、クララのみでなく、ヘルツォーゲンベルグ夫妻をはじめ、多くの人の意見を喜んで傾聴したことは、誠に不思議な感じがする。いかに親しい間柄とはいえ、こうした作品への率直な批判を、快く受け入れ得る友情というものは、お互いの間に誠実があって初めて、成立できるのである。

クララはブラームスのピアノ協奏曲は、変ロ長調(第2番)も、ニ短調(第1番)も演奏を断念していた。曲の要求するダイナミックな力強い表現は、女性ピアニストの力に余ることを、聡明な彼女はよく自覚していたからである。

原田光子. クララ・シューマン、真実なる女性

筆者別当勉註： 変ロ長調は第2番、ニ短調は第1番

この第1楽章序奏部のホルンの響きは、ブルックナーの交響曲第4番第1楽章や、チャイコフスキーの第5番第2楽章などと比べると、それぞれの作曲靈感の違いが鮮明になり面白い。ブルックナーのは、人は原子霧というが、私は、肉眼でもかすかに観えるオリオン星雲が、天体望遠鏡の倍率を上げながら観ていくと、途方もない星雲の圧倒的な広がり眺望に息を呑む、と連想してしまう。いわゆる“ブルックナー・クレッシェンド（次第に盛り上がるさま）”である。これこそ、20世紀後半のブルックナー狂信者たちが名付けた名言の一つなのだ。

一方、チャイコフスキーのは、まさに、ロシアの曠野にかかった晩春の大草原が頭に浮かんでくる。しかも、穏やかに明けるどこまでも広大な原野に吸い込まれそうになるが、そのロマン

たるや千一夜物語に出てくる空飛ぶ絨毯に乗せられた気分になる。しかも、咽^{むせ}び泣くようなホルンの遠吠えへロインにうっとりとしてしまう。

いずれも、忘れられない名曲の名シーンとも言えよう。

バックハウス

ベートーヴェンとブラームスをこよなく愛して止まなかったヴィルヘルム・バックハウス(1884-1969)は、ライプツィヒ出身のピアニスト。ドイツ国籍であったが、のちにスイスに帰化した。ベートーヴェンからツェルニーそしてリストという流れをくむダルベールの弟子であった。1900年、16歳の時にデビューし、1905年21歳の時、パリで開かれたルービンシュタイン音楽コンクールのピアノ部門に出場して優勝した。このときの第2位は、のちに作曲家バルトーク・ベーラであった。24歳のバルトークはひどく落胆して、ピアニストになる夢を捨てて作曲家としての道を選んだといわれている。

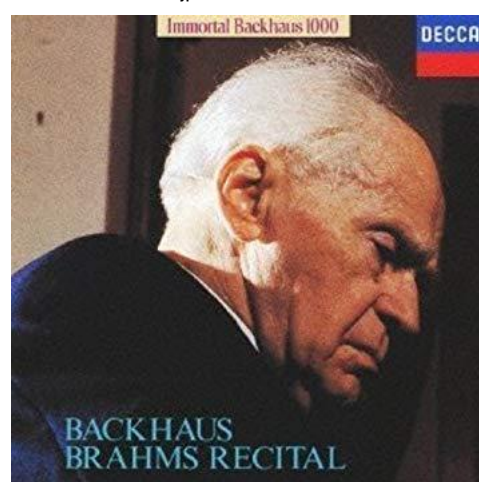
私が若いころ、バックハウスとイッセルシュテット指揮の組合せで、ウィーン・フィルが伴奏するベートーヴェンのピアノ協奏曲全集LPを、無理して買い込んでしまった。夢中で聴きまくり、バックハウスの豪華で壮麗な演奏に痺れまくった思い出が懐かしい。だから、他のピアニストのベートーヴェンには見向きもしなかった。バルトーク同様、世界中の超一流ピアニストたちは、今だに泣いているにちがいない。これを前人・後人未踏の偉業という。

社会人になってから現在までは、違ってきている。今回のブラームスでも、ポリニーやエレーヌ・グリモーなど脚光を浴びてきているピアニストの演奏も味わいながら、それでも、やはりバックハウスか、と私は嬉しく肯^{うなず}いている。

老年のバックハウス <https://www.amazon.co.jp/>



ピアノ協奏曲第2番 録音リハーサル



ブラームス・リサイタル

ネット検索すると、おびただしい数のファンの解説がヒットする。それで御飯を食べている音楽評論家など、もう、浮かぶ瀬もない。その中でも、とくに秀逸なコメントが目に付いたので、それを丸ごと以下に掲げる。

<http://www7a.biglobe.ne.jp/~hainn-hitorigoto/m-051brahms.html> “ハインの好きなクラシック”

ブラームス ピアノ協奏曲第2番変ロ長調 Op.83

ブラームスには協奏曲が4つあります。内訳はピアノ協奏曲2曲、ヴァイオリン協奏曲1曲、ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲が1曲です。

作曲家にとって協奏曲の数が4つというのは多いのか少ないのか、なかなか難しいところですが、しかし既存の協奏曲、つまり**独奏楽器主導型の華やかなコンチェルトに戸惑いを覚えていたことは事実**のようです。そしていざ協奏曲に取り掛かるならばそういったイメージを払拭し、独奏楽器とオーケストラが対等の立場に置かれる重厚な作品を書きたいと思ったのでしょう。そうした推敲が協奏曲の数を4曲にとどめたというのは考え過ぎでしょうか。

実際にブラームスの協奏曲は、ともすれば独奏楽器がオケに飲まれてしまうほど、両者が対等です。この考え方はベートーヴェンがすでに試みていますが、ブラームスはさらに徹底しています。彼にとって協奏曲というジャンルは、たとえばショパンのものとは正反対の鳴り響き方をしていたのでしょう。

この第2番のピアノ協奏曲は、いろいろな意味で注目すべき作品になっています。構想を得たのは生涯に9度にも及ぶ**イタリア旅行**の際。ドイツなどの北国に生まれた者は、南国イタリアの輝かしい気候風土に憧れを持つと聞きますが、ブラームスもその例に漏れずイタリア好きだったようです。

それはともかく、その**イタリアの輝かしい太陽の光や色鮮やかな海といった風光明媚が鮮明に浮かび上がる、ブラームスとしては珍しく明るい基調の作品に仕上がっています**。第2楽章の短調にしても、イタリアのタランテラや舟歌を髣髴とさせる、暗さの中にも明るい情緒を含む佳品となっているのです。

構成的にも興味深いものがあり、当時の協奏曲としては大変に珍しい4楽章構成をとっています。急速な両端楽章と緩徐な中間楽章という当時のスタンダードな協奏曲のスタイルに、スケルツォを追加した形をしているのです。オーケストレーションが重厚なのに加え、あたかも交響曲のような規模を誇っているものですから、ますますこの曲は「ピアノ付き交響曲」などと呼ばれるに相応しい外観をしているわけです。

私は昔、ブラームスのピアノ協奏曲といえば1番の方を好みました。しかし年を重ねるにつれてこの2番の明るさ、おおらかさ、輝かしさに惹かれるようになっていったのです。人間が丸くなったのでしょうか？（笑）

第1楽章は遠くの間々から鳴り響くようなホルンの序奏から始まります。この望郷の念がたまりません。すぐにピアノに受け継がれ、以後はオケをバックにしながらピアノ主導で盛り上がっていきます。

主部に入るとオケが取って代わり、同じ第1主題を強奏。豪放磊落に歩を進め、満を持してピアノ登

場。同じ主題が慈しむように現れます。**その後豊かな大自然を思わせる懐の大きな音楽の運びになり、とかく暗いと言われるブラームスの解放的な一面に触れることができます。**

コーダもピアノが技巧をひけらかすことはなく（ひけらかしはしませんが、実際には全体に難技巧）、ひたすら雄大な音楽を表出することに奉仕。前向きな気持ちになる音楽ですね。

第2楽章は唯一の短調で、3部形式のスケルツォ。少し落ち着いたくない冒頭のピアノの主題がスケルツォ主題。タランテラとは似ても似つかぬテンポなのですが、気分は踏襲している気がするのは私だけでしょうか。中間部は長調に転じオケによって提示されますが、ピアノが登場する頃には短調になっています。しかし喜ばしい気分の中間部です。

再現はピアノとオケがメロディと伴奏を入れ替えて登場。ラストはピアノとオケが華やかに掛け合い、終結します。

第3楽章はなんとチェロ独奏で始まる緩徐楽章。しかしこのチェロの奏でる主旋律がまたたまらなく美しい！ **全体にイタリア的な奔放さが光る曲ではありますが、ここでは北国の冬に思いを馳せるような懐かしい郷愁の歌になっています。**その後しばらくしてから、さりげなくピアノが伴奏的な音形を奏でて登場。ラフマニノフのようなロマンティックな音楽です。次第に盛り上がり、緩徐楽章でありながら劇的な力も窺える場面に入っていきます。

最後にはまたチェロ独奏が登場し、花を添えます。ピアノがサポート役に思えるほど、本当に惚れ惚れするチェロですね。

最もイタリア旅行の影響が顕著なのは第4楽章。非常に明るい、弾むような Rond です。かわいらしい旋律がまずピアノに提示され、すぐにオケに引き継がれます。私はここにモーツァルトの影響も見ます。その後イタリア的な憂愁をはらむ3拍子の音楽になりますが、これもまた美しい。本当にブラームスは、この曲では素直にメロディを歌っている気がします。意外に長く引っ張った後、Rond 主題の回帰。

ラストでも Rond 主題を速度を上げて回帰し、音楽を盛り上げます。こんなにも楽しげなブラームスは、他ではあまり見られないでしょう。

演奏は決定盤とも言うべき、**バックハウス、ベーム**のコンビによるものを推奨。ベームの好サポートもさることながら、バックハウスの噛み含めるような丁寧な歌いっぷりは他とは代えがたいものです。派手な技巧を楽しめる演奏ではありませんが、曲自体がそういうものを求めているのですから不要ですよね。

迫力ある低音を武器としたピアニストはたいていロシアものが得意なものですが、バックハウスは現代では見られなくなってしまった、「ドイツ的な低音の持ち主」でした。これほどがっしりとした深い味わいのある低音は、現在どこへ行けば聴けるでしょう。個人的にはブーフビンダーに期待をしていますが・・・どうか。

<http://www7a.biglobe.ne.jp/~hainn-hitorigoto/m-051brahms.html>

交響曲第4番ホ短調 作品98 (52歳)

クラシック巡礼の旅『哀惜と寂寞』

2009.12.27 2019.05.20改 別当 勉

ブラームスという人は、ほんとに全てにおいて後釜の人生を送った音楽家である。

先ず、シューマンの弟子であり、初めて恋焦がれた心の女性は、師の妻クララ・シューマンだったのだ。専門の音楽では、ウィーンの街では何をしてもベートーヴェンと比較された。

でも、ブラームスは43歳で敢然と巨峰ベートーヴェンに挑戦したのが、交響曲第1番:ブラ1である。これは不安以上に成功したが、第4楽章第2主題はベートーヴェンの第九の『歓喜の歌』を真似たのではないとも言われた。でも、ウィーンの街に新風を巻き起こしたことは間違いなかった。しかも、いったん認めるとマーラーが出るまでブラームスまでしか許さなかったウィーン気質の渦中であつたから、革命的だったに違いない。

ブラ1の成功から順調に交響曲を3番まですらすらと書いて世に出した。しかしながら、クララへの慕情は隠しながらも深層の心根からどうしても消えてくれなかつたのであろうか。一方、音楽の頂点を極めた神様バッハの境地に迫りたい、という熱望があつたものと思われる。この二つが見事に結実したのが最後のブラ4と想像したい。

思い返せば、大学5年のときであつた。たそがれの穏やかな夕日に染まる狭い4畳半である。レコードに針を落として、身構えても哀切極りない第1楽章が始まり引きずり込まれた。ヴァイオリンがユニゾンで奏でる2音の上下と下上のシンプルなメロディラインなのだが、バーンシュタインが言うとおり、たった二つの音でこれほどまでのロマンを表現したのは正にブラームスだけである。男でも女性のようにセンチメンタルになってしまうほど悲哀に満ちているのだから、たまらない。涙腺はもう閉まらない。クララへの密かな恋慕はやましく、言葉に出して伝えてはいけない、当然、コダマもないという失意があざやかに響いてくる。でも、コーダにて、これでもかというレベルの強烈な叫びが、まるでフラストレーションが爆発したようにオーケストラ・トゥッティ(全楽強奏)で締めくられる。僕の魂は完全に抜け落ちた。

そして、白眉の第4楽章だ。ブラームスは、ここで、全ての作曲家人生と恥じらいの失恋の自虐的結末の集大成を狙ったように、僕はいつも思い込んでしまう。とにかく、重々しいブラスの咆哮でパッサカリアのテーマが導入され、31の変奏が展開されるのだ。これはシャコンヌ型の変奏とも云われ、明らかに神様バッハを意識して、無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番シャコンヌの31バリエーションという人類の至宝ともいべき楽曲に果敢に挑んだのだ。変奏は、イントロ・テーマを何度も変化させて変奏すること、いまはモダン・ジャズでは定番の形式である。違うのは、インプロヴィゼーション(即興)かどうか、と回数だけである。でも、31回も変貌させることは技術以上に、たぶん、楽曲のイーディオム(句)を無数に積み上げたナレッジ・ベースが無ければ出来るわけがない。この31変化は、ずしりと聴きごたえがある。

この楽章、最後のバリエーションで曲調がバロック時代に戻ったような感じになったと思うやいなや、悲恋の終止符として、未練を断ち切って終わる。たとえようもない寂寥感に何も言えなくなる。この年になったから本物の「淋しさ」を感触できたが、あらためて聴くと身も凍るようだ。このような鬼気迫る演奏は、私が聴いた限りブルーノ・ワルターによる名録音(1960年頃ステレオ)だけである。

ブラ4は、完璧なエゴイズムの結晶である。身勝手な頑固さで主張したのだけれども、終幕で自虐的に追い込んでいくとてつもない寂寥感には何度聴いても胸が打たれる。楽曲における甘美さと悲哀表現は数えきれないが、惜別の寂しさを感じたのはこれしかない。

寂しさの表現は、非常に難しいのであろうか。この第4楽章のように臓腑に沁みわたる曲は、私は聴いたことがほとんどない。チャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」の第4楽章終幕と聴き比べることは、興味深い。「悲愴；第4楽章」は“これでもか”と訴えがうるさいから、逆に、私は「ご自由に」と言うだけになってしまう。共感が湧いてこない。

そう、ブラームスはさりげなく想いを込めた曲をつづったのである。主題は、バッハのカンタータ 150 番「主よ、われ汝を求む」BWV150 から流用したと伝えられている。

なお、第1楽章ホ短調の冒頭の哀切極まりない第1主題は、ベートーヴェンのピアノソナタ第29番『ハンマークラヴィア』の第3楽章における繋ぎのテーマに似ている。ヨハネスは敬仰してきた二人の大家にも、このホ短調交響曲を密やかに心から捧げたのである。

それらを、演奏で見事に音響にしたのが、名指揮者ブルーノ・ワルター(1876-1962)であった。演奏家の解釈と価値とは「そういうもの」なのだと、初めて納得した次第である。他に、名演奏と言われているカルロス・クライバーはワルターに迫るほど凄い、でも、リッカルド・シャイーやクリスティアン・ティーレマンなども聴いたが、それなりで良かった、という感想しかない。



www.maestrogarage.com/product/1155

左手のための J.S.バッハのシャコンヌ (BWV1004 を編曲)

ピアノのための 5 つの練習曲 Anh. Ia/1 第5番 二短調 1852~1877 年の間に作曲

バッハの無伴奏ヴァイオリンによる《シャコンヌ》のピアノ編曲版で有名なのはブゾーニのものであるが、もう1つ編曲ものがあって、これは一般的にはあまり有名とはいえない。それが、知る人ぞ知るブラームスの

『左手のためのシャコンヌ』

この曲は、右手を痛めて一時的に左手だけしか使えなくなったクララのために書いたので、左手だけで演奏できるようになっている。ということは、クララは一時もおかずに、このシャコンヌを弾きたくてしょうがなかったとも言える。ピアニスト舘野泉が、脳卒中を患い、回復しても右手が使えなくなったときに、飛びつく様に演奏したものは、まさに、一聴に値する。

とにかく、シューマンもメンデルスゾーンもバッハ研究に熱を上げ、無伴奏《シャコンヌ》もそれぞれがピアノ伴奏版を書いた。その影響は、クララやヨハネスに及び、特に、ヨハネスは変奏形式にこだわった作品が多く、バッハ研究は奥が深い。それら多くの成果をたどると、自然に、ブラ4の第4楽章に集大成したことが分かる。

ブラームスは、クララの身に心配ごとが起こると、自分の作曲した曲を献呈して慰めることが何度かあって、他にもクララのために書いた曲がいくつか残っている。クララへ献呈した曲で有名すぎるのは、頭書に掲げた《弦楽六重奏曲第1番》の第2楽章のピアノ編曲版の《主題と変奏》があり、これも曲名のとおり変奏形式で、余りにも高貴なロマンにあふれた印象のため、映画『恋人たち』に使われていた。

作曲の経緯 参考： https://www.nhkso.or.jp/library/sampleclip/music_box.php?id=76&iframe=true&width=840

1884年、^{ふたなつ}二夏の避暑としてオーストリア南部のミュルツツシューラクにおいて、ブラ4ホ短調の作曲に没頭する。彼はこの年に第1楽章と第2楽章の作曲を行い、翌1885年に第3楽章と第4楽章を仕上げて完成させた。

ブラームスはこの作品の作曲時に深いメランコリー（鬱）の精神状態にあったといわれる。作品がほぼ仕上がった1885年8月、ブラームスは、親友とも言うべきエリーザベト・フォン・ヘルツォーゲンベルク夫人に、この新交響曲について次のように述べる。

「この地ではサクランボは酸っぱくて食べられないのです。あなたはこれが気に入られても、お食べにならないでしょう。」

また、ブラームス信望者である指揮者ハンス・フォン・ビューローに対しても、

「私が恐れているのは、この作品が当地の気候にあっていないことです。当地のサクランボは甘くならないのです。貴殿はそれをご賞味されないでしょう。」

ブラームスはこの交響曲をサクランボになぞらえて、作品は必ずしも耳障りが良くないと、作品は広く人々の理解と共鳴を得られないのではないかという懸念というか、謙遜を述べ

ミュルツツシューラク



<https://music-specialty.com/classic/category89/entry2911.html>

る。そう、この人は己の作品には恥じらうほどの謙虚さを持っていた。

第4楽章ではバッハの《カンタータ第150番「主よ、あなたを求めます」》の終曲の「シャコンヌ」の主題を借用している。ブラームスはバッハ研究家のシュピッタとの交流を通してこの作品の写しを手に入れた。シャコンヌはオスティナート・バス（執拗低音）の一つで、バス定型の反覆しながら変奏する手法である。第4楽章ではブラームスはこの主題をバスではなく、上声部に置いている。

ブラ4は1885年10月25日、親友ハンス・フォン・ビューローが指揮者をつとめるマイニンゲン大公の宮廷楽団でブラームスの指揮により初演された。ブラームスの予想に反して、マイニンゲンでの初演は大成功で、大公の所望で繰り返し演奏されたほどであったという。1885年の『新音楽新聞』は「マイニンゲンの宮廷楽団の新たな勝利」と評して、この初演の成功を報じた。ブラームスにとって、これまで嫌な思い出があったライプツィヒでの上演も上々で、彼は何度もカーテン・コールを受けた。

参考：https://www.nhkso.or.jp/library/sampleclip/music_box.php?id=76&iframe=true&width=840

赤いハリネズミ

ブラ4ホ短調のあと、放浪士ヨハネスは、好きな旅を続けながら、カールスガッセの自宅にて悠々自適の生活に溶け込む。レストラン“赤いハリネズミ”の常連としてワインと料理に舌鼓をうちながら、独身生活を満喫することが習慣となる。それが噂にのぼり、一つの風物詩ともなって有名なカリカチュア（右）も書かれた。

ハリネズミは、イギリスでは“ヘッジホッグ”として有名であり、住居の庭に夜中に餌をさがして出現し、人々にミルクをふるまわれて可愛がられている。必ず雄雌のつがいで来る。とにかくおとなしく、刺激しなければ全身の針をとがらせない。あたかも、悠々としたヨハネスみたいなのだ。

（彼には連れ合いがない！）



<http://faf-orch.com/main/archives/1175>

クラリネット五重奏曲 口短調 作品115 58歳

余りにも有名である。モーツァルトのものと並んでCDもセットで組まれている。

しかし、そのやるせなさと、いじけた曲調に辟易する人も少なくない。私もその一人であったが、60歳を過ぎるとなぜか聴けるのだから不思議な感覚でもある。やはり、この曲はブラ4ホ短調のあとの“蛻の殻”で創った所以が明らかとなる。

20代や30代の聴覚は、受け付けない。ただし、ヨハネスが得意な変奏形式による第4楽章は、ジャズ・ファンなら「なんだこれ！」と耳を傾ける人がいてもおかしくない。

さりながら、この曲がヨハネスの最後を飾るもの、と言われると聴かざるを得ない。とにかくやるせないなので、早朝に聴くと意外に沁みってくる。そして、彼の今生への惜別の歌が聴こえてくる。でも、悲しくない。まるでヨハネス和尚の朝務における読経のようである。

作曲は、1891年、58歳の夏にバート・イシュルで行われた。ヨハネスは夏期に様々な避暑地を訪れたが、イシュル以上に快適な土地はないとして、前年からその地で夏を過ごすようになっていた。

マイニンゲン管弦楽団のクラリネット奏者、リヒャルト・ミュールフェルトが吹く音に魅せられ、完全に虜になってしまった。当時、彼はすでに創作意欲を失っており、1年以上も作曲の筆をおいて

る状態だったが、この時、生涯に感じたことのないほどのクラリネット音に魅了され、たちまち作曲靈感を回復したと伝えられている。

初演は非公開で、マイニンゲン宮廷において11月に行われた。演奏は、ミュールフェルトとヨーゼフ・ヨアヒム並びにマイニンゲン宮廷管弦楽団であった。1892年1月にウィーン初演が行われ、その後、ミュールフェルトとヨアヒム四重奏団もウィーンで上演を行って大成功を収めたという。



バート・イシュル

<https://www.german-ex.com/tour/item/8193.html>

亀裂から和解へ

原田光子. クララ・シューマン、真実なる女性

クララとブラームスの友情の中にも、お互いに不快な感情がたびたび生まれたり消えたりした。その中で最も大きな誤解は、ロベルトの第四交響曲の出版が原因であった。当時、ブライトコップ・ヘルター社から、シューマン全集が刊行されることになり、クララはその準備に忙殺されていたので、むしろブラームスも喜んで援助を申し出たのである。

次第に年をとってきたクララは、最愛の夫を記念するこの仕事の完成を見ずに、死ぬようになってはという不安から、次第に辛抱ができない気持ちになってきた。その結果、人にも仕事の援助を頼むことにしたのであるが、・・・・

70歳前後のクララ



<https://blog.goo.ne.jp/hanamizuki-ty/e/27b844d9c9de5b185de680d26ad4d7c8>

そこへニ短調交響曲の問題が起こってきた。この交響曲は青年時代に一度完成し、後にシューマンが改曲して、第四交響曲として発表したのである。クララはシューマンが作曲家として初期時代に属するこの原作を改訂した時には、円熟した時代であり、自分がロベルトの意思に忠実であるためにも改訂版を全集に加えるという意見を持っていた。

ブラームスは原作の方の草稿を見て興味を持ち、オーケストレーションの効果に対する専門家の意見を求めて、ドレスデンの指揮者フランツ・ヴェルナーに、クララに無断で相談した。ヴェルナーは研究の結果、シューマンの晩年のデュッセルドルフ時代には「魅力と軽快さと透明さ」があると言った。

クララは納得できなかったので問題をそのままにしていると、ヴェルナーがこの初期の原稿を、シューマンの遺作として出版するという記事を雑誌の記事から知ったのである。「シューマン全集」以外に、他人が無断でそのような出版をすることを、クララはひどく不快に感じた。

1889年（クララ70歳）にこの原曲の出版について、ブラームスがクララに相談したことがあったが、その時クララは確答を避けたのでああった。ブラームスはこの原曲と、後にロベルトが改曲したものを、ページの左右に対照させた豪華版の出版計画に夢中になっていたもので、クララに相談すればせつかくの計画が挫折せぬかと恐れていたものであった。立派にできた暁には、彼女に赦^{ゆる}してもらえるものと身勝手に考えていたのである。しかしすべての計画が、彼女の背中で行われたこと、ワーグナー派の指揮者ヴェルナーが加わったことは、彼女の怒りを刺激するに充分であった。

クララが、ドレスデン旅行中に受けたヴェルナーの態度への個人的不快も手伝って、クララはそれから残された彼女の聖なる権利に対する、この冒瀆に堪えられなくなったのである。

「出版に私が反対しなかったとしても、承諾したものと勝手に解釈されては困ります。ヴェルナーが加わったことも私には理解できません。出版者が貴方ならまた全く別問題です。作者に誰よりも近くにいた方のことですから、貴方の不満については、私は何も申しません。一致はとうてい不可能です。」

とクララは（ブラームスに）書き送った。

その頃のブラームスはクララの愛情の圏外に残された自分を意識して、ひどく淋しく惨めに感じるのであった。翌1892年のブラームスの59歳の誕生日がくると、ブラームスはもはや寂寥に堪えられなくなって……

ブラームスからクララへ

1892年9月13日、ウィーンにて

この佳き日にあたり、放浪の子が昔のままの尊敬のうちに貴女を想い——貴方は彼にとって世界で最愛の人です——すべて美しく望ましい事を、心から祈ることをなにとぞお許しください。寛大な貴女の心を誰よりも失った私は、長い間そのために苦しみました。こんなにもご非難を受けるとは夢にも思わなかったのです。私にはご立腹の真の理由が例の交響曲の出版だけによるとはどうも受け取れません。

数年前にも同じことを感じたことがあります。私が編集したシューマンのピアノ曲が、全集に加えられなかったことから、私は全集に私の名が関係することをあなたが好まれないという印象を受けました。私にはその他に理由が発見できません。友人に対するとき、私が不器用であることを自覚しておりますが、貴方はこの私の短所に対しても、長い間忍耐して下さいました。もう2、3年我慢していただけたらと思います。40年にわたる忠実なご奉公（貴女と私の関係をいかにお呼びなさろうと結構です）の後に「新しい経験の一つ」と諦めてしまうのは、あまりに残念です。私は孤独に慣れていませんし、この大きな空虚さに直面することも耐え得ることと信じてますが、今日はどうかもう一度、貴女とご主人が私の人生の最も美しい経験であり、私にとって最も豊かで高貴なものであったことを、繰り返させていただきたく存じます。貴女にお目にかかる機会を失う苦痛に会うのは、自らの振舞いが招いたことだと深く感じております。しかし貴女と「彼」に捧げる愛情と尊敬の想いは、永遠に私の心を暖め、明るく照らし続けることでありましょう。

返事は9月末になってフランクフルト（バーデンバーデンから移ったクララの拠点）から書かれた。

シューマンの名と貴方の名を結びつけるのを、私が好まぬとは、何といふとんでもない誤解をなさるのでしょう。そんなお考えはきっと魔が差した折にでも起こったのだと思います。長年の芸術的な協力の後に、そんなことがお考えになれるとは、私にはどうも呑み込めぬことでございます。そんなことは私が長年言ってきた貴方への賛美や、貴方がお手紙の最後に書かれたこととも、一致しないでは

ありませんか。貴女がしばしばご交際のしにくい方だとおっしゃるのは本当です。けれども私の貴方への友情は常にそれに堪えてまいりました。

もうやめましょう！ 不和や口論ほど私を不幸にするものではありません……私はこの世の中で最も平和を愛する人間ですから…… 愛するヨハネス、私達もまた調子を揃えましょう。貴方も望みなら、貴方の美しいピアノ曲が、よい機会を与えてくれると思います。

長い間待ち焦がれていたクララのこの手紙を受けとると、ブラームスは「心の底」から、彼女のやさしい心に感謝して

「インテルメッツォ（間奏曲）作品117

を早速、送ってよこした。この作品は、いたわるように流れる。ヨハネスには信じられないほどの優美な仕草があふれている。クララも癒されたにちがいない。

このようにして、お互いの誠実さと率直な努力によって、二人の間の誤解は常に和解への道が開けるのであった。43年間に彼ら二人の間にとりかわされた、現存している800余通の手紙を詳しく検討する時、真の意味での争いは発見できない。

原田光子. クララ・シューマン、真実なる女性



www.takahiroyoshikawa.com/milan/wp-content/uploads/2014/10/brahms2.gif

問題は少し違うと、私は想いはかれる。

つまり、ヨハネスはドイツとオーストリアの都市や宮廷から表彰あるいはオーケストラ指揮者の招請を受け、交響曲の演奏では絶賛されてきた。私たちのような庶民感覚では、もはや天下人の彼は舞い上がり、秀吉のようにのぼせて威張りくさるのが当たり前である。欲しい女性はいくらでも手をつけられる、と思うのが当然である。ところが、彼にはクララ以外に心のふるさとなかった。それを、クララが解らないはずがない。クララの三女ユーリエとヨハネスのときもそうだった。しかし、クララは、いつもヨハネスが彼女に頼ってくることを望んだ。

一方、夫ロベルトより遥かに巨大な音楽家になってしまって、クララは畏怖したのではないかと想像できる。そんな想いもクララは抱いていなかったとは言いきれまい。

ヨハネスにも僅かながらも増長があつて、師のシューマンの遺作も自主出版しようとして、クララに咎められたのである。慢心は、心のふるさとには弱い。それが和解になったのだ。

さりながら、ヨハネスの音楽史への貢献度は^{おお}巨き過ぎて、ロベルトやクララの存在が、私たちクラシック・ファンの視界では^{かす}霞んでしまうほどである。クララは何をさておいても、そこを解ってやるべきであった。

1896年5月、76歳のクララは消耗しすぎた心身とともに、息をひきとった。

1897年4月、64歳のヨハネスは、いまでいう数種の成人病に冒され、クララの後を追うように永眠した。

ブラームスが関係した音楽家

ブラームスが敬仰した知人・友人はいない。強いて言えば、クララ・シューマンだけだが、彼女は半分ほど**心の女性**であった。とにかく独立不羈の男である。彼を御することは誰もできない。が、後輩の音楽家には優しくかった。ただし、マーラーを除く。

作曲家	1801-1850	1851-1900	1901-1950
ブラームス(1833-1897)			
ワーグナー(1813-1883)			
ドボルザーク(1841-1904)			
ブルックナー(1824-1896)			
リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)			
マーラー(1860-1911)			
チャイコフスキー(1840-1893)			
ヨハン・シュトラウス II(1825-1899)			
ハンス・フォン・ビューロー(1830-1894)			

ワーグナー (1813-1883)

1864年2月6日に、ブラームスのファンであるハンスリックとタウジヒの後押しで、シュタントハルトナー博士の仲介によりブラームスとワーグナーは会った。このときブラームスは31歳で、ワーグナーは51歳であったからかなりの兄貴分である。ブラームスは、《ヘンデルの主題による変奏曲：作品56a》をピアノ演奏で披露した。ワーグナーは深く感銘して「古い形式をどう扱うべきかを知っている人の手にかかると、古い形式で未だどんなことが行われ得るかを見させらる。」と言葉を發した。その後、二人は顔を会わすことがことがなかった。ワーグナーとブラームスは、彼らの芸術において何の接点も見出すことはなかった。しかし、それぞれの取巻き支援者たちが勝手に争い、あたかも二人が陰悪であるというように世間からは観測されていく。

1868年、プレーメンで《ドイツ・レイエム》が初演された同じ年に、ミュンヘンではワーグナーの《ニュルンベルグのマイスタージンガー》も初演された。これにより、ブラームスはやっとワーグナーと肩を並べたのである。そして、二人の支援派閥間の対立抗争が燃え出した。

1870年には、37歳のブラームスは《ニーベルングの指輪：1.ラインの黄金》と《ニーベルングの指輪：2.ワルキューレ》のミュンヘン上演を聴きに行っており、楽譜も研究していた。ワーグナー音楽について繰り返し、賛美した。しかしながら、ワーグナーはブラームスの作品には興味を持たず、1869年頃、彼の評論【指揮について】にてブラームスに対する隠れた攻撃を行っており、次第に、ブラームス親派らを刺激して、結局はワーグナーの敵愾心を燃え立たせた。が、ブラームスの拘りはほとんど無かったという。なんとなく、新興の田舎町パイロイトのワーグナーは自身の取巻き信望者たちに弱く、楽都ウィーンのブラームスは支援者たちが煽ることには余り乗らず、かえって迷惑のようであった。

私が思うに、神話に舞い上がる巨神兵ワーグナーは、楽劇という新たなジャンルの開拓に、脇目もふらずに突き進んだことに着目すべきである。先鋭化した音楽の革新を求めるので、その視界にブラームスはいない。

一方、ブラームスはひたすらに交響曲を噛みしめていただけだから、当然、ワーグナーに競争心が湧くことはなかった。ただし、ワーグナーのオーケストレーションには興味を持った。楽劇はワーグナーで終始し、歴史に跡継ぎはなかったのだが、その壮大華麗な管弦楽法はブルックナーやマーラー、ひいてはストラヴィンスキーらに受け継がれたように歴史は彩^{いろど}っている。シンフォニーは、ブラームスの成果が数多の作曲家への道標ともなって、競うように展開した。二人のベクトルは、楽曲宇宙では異方性であったと言えるであろう。

されど、二人とも、ベートーヴェンの意志を継いでゲルマンの咆哮をあげたことは共通している。

それを鮮やかにまとめ上げたのは、宇宙からの使者ブルックナーと言えるかもしれない。

ドヴォルザーク (1841-1904)

1874年、33歳のドヴォルザークは交響曲第3番、第4番他数曲を、新たに設けられたオーストリア政府の国家奨学金の審査に提出した。審査員のひとりであった41歳ブラームスの評価もあり、1875年2月この奨学金が与えられることになった。その金額(400グルデン:約400万円)は当時の彼の年収(126グルデン)の2倍以上にあたる高額なものであった。5年間これを受け取っている

『モラヴィア二重唱曲集』で、「ベルリン国民新聞」はこれを「美しい乙女たちが露のきらめく良い香りの花を投げ交わしている」と激賞した。ドヴォルザークは1877年に奨学金審査のためにこの作品を提出した。審査員を務めていたブラームスはこの曲に目をとめ、懇意にしていた出版社、ジムロックに紹介した。ブラームスは紹介状に「この二重唱曲がすばらしい作品であることはあなたの目にも明らかでしょう。しかもそれらは優れた作品なのです」と書き送っている。個人的にも、1878年、ドヴォルザークはウィーンにブラームスを訪ね、翌1879年にはブラームスがブラハのドヴォルザークを訪ねるといふ具合に親しい交際が始まった。

彼の才能である、次から次へ、涸れることなく湧きあがる豊かな旋律を、ブラームスは愛した。自嘲ぎみに、「ドヴォルザークの仕事部屋のクズ籠の中の旋律を繋ぐだけで立派な作品が出来上がる」あるいは「屑籠から誰かが1枚でも拾って持ってきてくれたなら、私は交響曲を1曲書けるのだが」などというエピソードは尽きない。

ブルックナー (1824-1896)

街中で偶然会ったりしたときは、ブルックナーが一方的に、丁寧すぎる挨拶をするのが常だったというが、取り巻きどうしの対立や中傷合戦は激しいものであったらしい。また本人たちも、私的な場では互いの作品に対して結構辛辣なことを言っていたという話が残っている。そんな二人が、双方の支持者中の穏健派が企画した食事会で顔を合わせたのは1889年10月25日のことだった。…会場はブラームス行きつけの料理店「赤いはりねずみ」。早めに到着したブルックナーがブラームスを待つ。二人は顔を合わせてからしばらく沈黙。仕方なくブラームスが努めて気楽に

「とにかくメニューを見ませんか。」

メニューを見たブラームスが

「あ、私はこれが好物なんだ。」

と言うと、ブルックナー

「ブラームス博士、その点では私たちは意見が一致するですよ。」

一同大爆笑。それでムードがほぐれ、あとは和やかな雰囲気の中に食事が進んだ……という。

ブルックナーの交響曲第8番の初演(1892年12月)後、同曲への感想を直接求められたブラームスはきっぱりと

「ブルックナーさん、あなたの交響曲は私にはわかりません。」

ブルックナーも即座に応戦した。

「私もあなたの交響曲について同感です。」

1896年10月、ブルックナー死去。カール教会での葬儀には多くの弔問者が詰めかけたため、堂内に入れたのは一部の関係者だけだった。そこに現れたブラームス。堂内に入るよう促されたが、「すぐに私の番だ。」とつぶやき、その場を立ち去ったという。

<http://tillne.life.coocon.jp/ne%20classics/ne%20bruckner/ab005.htm>

問題は、ブルックナーとブラームスが何を仰いで作曲したかである。ブルックナーは、ベートーヴェンの第九をピアノ演奏で熱心に研究したという。ブラームスは、明らかにベト5ハ短調であった。そして、ワーグナーであるが、彼はベト9の第3楽章アダージョ・カンタービレに耽溺して、小林秀雄や五味康祐の言う『無限旋律』を編み出した。いずれも、ベートーヴェンを敬仰していたことは、明らかに共通している。お互いの妍を競うことよりも、そいった心を打ち明ければもっと和やかな間柄になったのではないだろうか。

リヒャルト・シュトラウス (1864-1949)

リヒャルト・シュトラウスとブラームスとの関係が残っているのはブラームスが52歳の時、すなわち、1885年です。これはリヒャルト・シュトラウスが、ハンス・フォン・ビューローが指揮者を務めていたマイニンゲンの宮廷楽団の補助指揮者の就任したことによるものです。リヒャルト・シュトラウスは自分が作曲した交響曲の批評を求めたところ、様式的な点などかなり辛い点数をもらったようです。その後もリヒャルト・シュトラウスはブラームスとは違った方向の音楽を目指し、むしろ、ワーグナーやリストの方向に向かっていく。

マーラー (1860-1911)

1884年、当時最高の指揮者として認められていたハンス・フォン・ビューローに弟子入りを希望したが、受け入れられなかった。

1894年にブラームスがバート・インシュルに滞在。マーラーはブラームスを訪れるが、議論好きのマーラーをブラームスはあまり好ましく思わなかった。が、ブラームスからは道徳的立場からの支援をとりつけることに成功した。この交響曲第3番の第1楽章冒頭で、8本のホルン斉奏によって呈示される主題は、ブラームスの交響曲第1番の有名なフィナーレ主題や『大学祝典序曲』との関連が指摘されている。

マーラーの前に立ちはだかったのは、ブラームスではなく、すでに故人となっていたワーグナーであった。ワーグナーが唱えた反ユダヤ主義が、ユダヤ人であるマーラーのウィーン進出の障害となったのである。

[https://ja.wikipedia.org/wiki/交響曲第3番_\(マーラー\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/交響曲第3番_(マーラー))

1897年、マーラーは作曲家としてのデビューを果たそうと、「ベートーヴェン賞」という、当時もっとも権威のある作曲コンクールに、マーラーの自信作であり、カンタータ「嘆きの歌」で応募したが、落選。その時はさすがに審査員たちを恨んだという。古典礼賛のブラームスに、ワーグナー嫌いのエヴァルド・ハンスリックなど、審査員はバッハやベートーヴェンのような古典的な形式を好んだ連中だったから無理もないと自ら慰めたようだ。

1898年、前年に没したブラームスと入れ替わるように、マーラーはウイーンフィルの指揮者となる。

チャイコフスキー (1840-1893)

1888年の正月、チャイコフスキーとグリーグがブラームスを訪れた。

チャイコフスキーはブラームスに直接会うまでは、ブラームスの音楽に否定的だったが、直接会うことによって評価が変化し始め、1889年にはハンブルグで演奏されたチャイコフスキーの交響曲第5番をブラームスと一緒に聞き、演奏会后、食事をして大いに意気投合したことがチャイコフスキー自身の日記に残されている。

ブラームスとチャイコフスキーは、育った風土が典型的に分れており、耽美する曲調や曲趣など完全に水と油である。でも、私のようなフリークはいずれも好ましく、時代と気分に応じて味わってきた。

なお、グリーグとの触れ合いに関する情報は見当たらない。

ヨハン・シュトラウス II (1825-1899)

ワルツ王のヨハン・シュトラウスとの交流は、夏を過ごしたバーデンバーデンのクララ邸で始まった。

ブラームスは晩年には、イシュルで夏を過ごすことが多くなるが、その地では数多くの友人との交流があり、中でもヨハン・シュトラウス一家との交流は親密で、ブラームスがシュトラウスの別荘を訪れることが多かったという。

ヨハン・シュトラウス II 夫人のアデルが、ブラームスに対して、彼女の扇にブラームスのサインが欲しいといったときに、ブラームスは、その扇に「美しく青きドナウ」の最初のいくつかの音符を記した上、「残念ながら、ヨハンネス・ブラームスの作品ではない。」と書き記したというエピソードがある。素敵な作品だと思っていたことは間違いない。

ヨハン・シュトラウスは現代の流行歌作家のようで、二人を並べて言及することは恥じるべきだが。

芸術的作品とは、何度も鑑賞・賞味したくなるものである。その数が多いほど芸術性が高いという。真の美味い物と同じ。というのが私の定義である。

ハンス・フォン・ビューロー (1830-1894)

晩年のブラームスにとって、最良の友であった。

一流の指揮者・ピアニストのハンス・フォン・ビューローと、初めて出会うのは1854年で、ブラームスが21歳のときであった。当時、ビューローはワーグナー等で代表される新ドイツ派を代表する指揮者として活躍していたので、接点は無かったが、たまたまハノーファーの演奏会で出会った。

ビューローの夫人はリストの娘コジマであったが、彼女は別れて、リストの盟友ワーグナーにコジマは再婚してしまった。この後、彼らと袂を分かち。それから、ビューローは次第にブラームスに魅かれていく。

1884年になって、51歳ブラームスは、イタリア旅行の途中でマイニンゲンに立ち寄り、1880年から指揮者として活躍していたビューローに出会う。合わせて、ビューローの紹介でマイニンゲン大公とも知己を得る。1885年に交響曲第4番が完成して、初演の地にマイニンゲンを選び、この地のオーケストラがビューローによって厳しく鍛えられて高いレベルにあったことと、マイニンゲン大公の計らいの結果、自らの指揮で、大成功を収める。1887年に一緒に演奏活動を行い、ビューローのピアノ、ブラームスの指揮によるピアノ協奏曲を演奏した。

バッハ、ベートーヴェン、ブラームスを初めて“3B”と呼んだのは、ビューローであった。

<http://www.prmvr.otsu.shiga.jp/ensemblevoce/Brahms/Brahms1.html>

エピローグ

ドイツ音楽を世界の頂上に押し上げた最後の男は、ブラームスと言えよう。他に、いろいろと出てくるが、いずれも支流である。ただ、一人だけ同時代の7歳年上のブルックナーという恵まれない交響曲作曲家だけがブラームスを追い掛ける。しかし、当時は絶滅危惧種とも言われていた。20世紀後半になって、^{ようや}漸く、ステレオ録音技術の急激な発達と、その広汎な普及に伴い、^{にわか}俄に、ブルックナーの交響曲は地球上のクラシック・フリークたちを、^{とりこ}虜にしてしまった。つまり、スケール感が地球を飛び出して宇宙規模になったから、19世紀のオーケストラと指揮者の感覚では解釈・演奏ができなかったのだ。天文学でいえば、アンドロメダ銀河を鮮明に観るには口径2.5m以上のパラボラ型反射望遠鏡とエドウィン・ハッブルの登場を待つしかなかった。同様に、ハイファイのステレオ録音・再生という交響曲鑑賞の手段がリスナーの手元にくるまで、ブルックナーの交響曲は、あまり審美されなかったのである。そんな宇宙人ブルックナーでも、先駆の年下のブラームスには、敬意を払ったという。

ブラームス(左)とブルックナー(右)

カリカチュア=戯画



<http://tillne.life.coocan.jp/ne%20classics/ne%20bruckner/ab005.htm>

果たして、ブラームスが憧憬し、死ぬまで尊敬し、信望したクララは、ブラームスの底知れないほどの巨大な価値を、そこまで気付いたのであろうか。19世紀の音楽史を振り返ることができる21世紀に立つ私は、背筋が凍るほど、ブラームスのそういった無念さに同情してしまう。

さりながら、『道の道とすべきは、常の道にあらず。』と中国古代の賢者：老子が総括した名言にからめると、ブラームスの作曲家という道も、クララの演奏家という道も別々に^{ひら}拓かれる運命だったのかもしれない。それぞれに険しく断崖絶壁を^ぬ縫うような、あたかも蜀の栈道のようだったのだ。しかも、クララの場合はロベルトの7人の愛児たちを養育するため、経済的・現実的に追い詰められた責務をまともに背負い込んだ。演奏会で稼ぎながら、そんな俗世間的な重負荷にも拘わらず、バッハ、ベートーヴェン、シューベルト、メンデルスゾーン、シューマンと続く真正ドイツ音楽を披露し続け、パガニーニやリストなどの時流におもねてしまう聴衆の耳を鍛え直したのであるから、その貢献度は計り知れない。特に、当時忘れられていたベートーヴェンのピアノ曲では、超難度の名作「ハンマークラヴィア・ソナタ：作品106」を

度々採り上げ、ピアノ協奏曲：作品73「皇帝」も積極的に演奏し、ドイツ人の誇りを呼び覚ましたことは筆舌に尽くし難い。まさに、これをクララの「道の道」というのであろう。

一方、ブラームスは絶えず、新作についての診断をクララに求めたという。思慕の情が切れなかったのか、いや、クララの精緻な楽曲査定能力を評価していたと観るのが妥当であろう。たぶん、離れてはいても、喩えればスコアをドローンに括りつけて飛ばすようにして、彼女の審美眼に頼った。彼はそうやって、涙ぐましいほど、絶えず伶俐なクララへの親愛の情を保ち続け、歴史を揺るがすほどの名作を積み上げたのだ。貧乏な放浪者は、次第に、作曲や演奏の収入が増え、ウィーンで一番豊かな音楽家になって、クララへの金銭的な支援をしようとすると、クララからきっぱりと断られた。でも、ブラームスからの新作診断の要望には、いかに忙しくともクララはロベルトの遺志を継いで、積極的にブラームスへの支援を続けた。

すなわち、ブラームスの産み出した荒々しい楽曲はすべて、クララの査閲により、いわばカイロプラクティックのような整曲術が加えられた。交響曲などは、わざわざピアノ版スコアを書いて送ったらしい。そういった、ゲルマンの猛々しい野生をそぎ落とされながらも、こまめに想いはかり、クララに対する敬愛の姿勢は崩さなかったことは、事実である。これが、ブラームスの「道の道」となった。

どんなに著名な小説家でも、この類^{たぐい}稀な二人の人間^{まれ}の人間たる人間らしい関係は、物語にできないにちがいない。

ただ、私たちはブラームスの音楽を聴くたびに、角^{かど}がとれたゲルマンの咆哮が、「クララを忘れられない！」と、私たちに響いてくるのだから、始末に終えないことは確かである。

F I N 別当 勉

<参考図書等>

No.	題名	著者	発行元
1	ブラームス:生涯と芸術	カール・ガイリンガー 訳;山根銀二	芸術現代社
2	ブラームス:カラー版作曲家の生涯	三宅幸夫	新潮社
3	クララ・シューマン 真実なる女性 (完全版):kindle電子版	原田光子 <1941、第一書房>	古典教養文庫:2018 国立国会図書館の デジタルコレクション
4	“ハインの好きなクラシック” ブラームス ピアノ協奏曲第2番変ロ長調 Op.83 http://www7a.biglobe.ne.jp/~hainn-hitorigoto/m-051brahms.html		